



特別
5
4895



門 へ 5
藏 4895
卷

早稲田 大學 図書館
冊 27.5.8 號
藏 ▲ 書

東運秋の道とてあり
子か何いといふらん
わしは



洞いふふふふふふふふふ
竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹
あふふふふふふふふふふ
なすこふふふふふふふふ
をふふふふふふふふふふ
とすはふふふふふふふふ
なすふふふふふふふふふ
ゆふふふふふふふふふふ
なけふふふふふふふふふ
青ふふふふふふふふふ

とありしとありのうらまへよ
所物の五段をわたりゆく
馬の根こゆゆのわあまを校
合懐く林風を虚動
樹刻之とつり悔時つら
代つらつらとつらと祇公の
風とほふじまうら老れ
此の素葉まへわらせのあふ
さうしこの音元禄十七の
まに月序年うらまへ

親明軒は橋柱順

愚句老葉第一

春連歌

宗祇

月乃様花れまらわたりか
かすこふみりら花乃押を
まらと押の山まをみく
春ははあむれ愚存い奥ふ記
竹色白よむすひゆるさうら
わらわらあささまらと押の山野
下相更ふらうらえ花のあふ
あささや押けさやあま
これ押せりせうかたりや
山の色みくさつらうらま
かひくまらと家よの狸たの
かんや

こころは柳をらむの法

ふらふらとわかれ川舟のまじり

河邊の心一葉にすくはれし

景氣をらむふとせありし

いひしす

書柳れみよりのいとほし

こころのうらみよきをせうま

長

梅柳をらむを神にまかせ

あそびしとまをこそあ

喜柳をみよりの法

柳とあむ奇ぬきす

こころは柳をらむの法

かすうらみよりの法

後れ紋よやまを織半の今

何よりあよその心ありや

うらみよりの水はしら白

れ心よやまを織

水は柳よあやまの法

心乃みよりの法

長

後れ紋よやまを織

又あやれ縁ありや

水は柳よあやまの法

心乃みよりの法

あやれ柳よあやまの法

花らす風いつよとある
尾上よりさびねの一本
一本より吹らるる花をさるる
こころらるるさるるさるる
さるるさるる

尾上此松乃其の系集也

去年此あ〜乃ささ山里

月日此うらなふささと山里人

よかりこおりなかり

此のまふおき〜わらん山とる

長注よ此句なり

のち七日月乃さるる

白馬と見え〜袖乃つ〜ありて

高日白馬節會也百官云郷見

所よかり〜禁中の節會いさか

花やさし〜さるるさるるさるる

のち田舎ら此公侍らんれ又階

そのちらさるるさるる

長

け節會年中行事よ〜さるる

二日乃夕月秋物川つ〜さるる

と見え〜よとらるるさるる

つとむとより清少納言枕
茶紙よもあはれこり

日あはれも花あはれ
梅あはれもあはれ

自注こころ

け句別乃心あり 若菜つむ人
梅あはれかこせと也

なひこころとてはるき折入法
あはれ川一れお山雲きて
あはれ有心やいひゆんお山れ
雪の河常れ氣氣明もは依保
八川系乃数也

長法はよけ句なり

本つきおとりにあはれとて
云ふぬ谷と氷やあはれん
あはれりあはれ氷と分り

雪うつし深谷乃小川雲寒く
あはれ谷乃をあすすくあはれり
氷ときりりとあはれり也
あはれりあはれりあはれり
あはれりあはれりあはれり

水れららとてあはれり
あはれりあはれりあはれり
あはれりあはれりあはれり
あはれりあはれりあはれり

付録

長年... 雲の下店

日... 雲

山... 雲

一筆

今... 雲

一筆

一筆

一筆

け平れせうけしうしんりや

むし東れ山もすむか
雪清い何れ白根れいあかん

長
甲北あれ白根とかなあきし孫乃
うさきんたといひしうぬれれ
雨よ精粉目とつをうらん
みや詞乃あきしうさきん
平とくいさきしうらん

草いさかな 任去れし
新よりき里小野乃雪清い
付り心しうさきしんむし

云しれ山大半あきし
き里小野れ雪清てきし
かんや
任去乃しき里小野れ
印かなし

梅ふら花れ在り乃月
残らとい月乃しきし
らじいしききあかり
あきし月かなし

老朽ら栽し若木れ梅咲て
よいせしあきし

月おとうと梅の袖

横電れ定て押ししと様あり

そ梅の誰とさひゆらん

梅の袖乃月と押しやせら

こころも月いたのさきよの公後

そそぬかの月と梅は後無せり

梅は花のいさつと袖の上よ

朝から月乃のきうあつあつ

けせしけしあつあつ

ふあつたとうと山れん

梅の香よ起出らぬ月あて

枕よりさおわくさゆせは後

月一色よきとめひらんさく

そと誰とさつあつあつ

花とくすすいさつと月あて梅乃

かのさつあつあつ

さつあつ乃やとあつあつ梅乃花

色とさつあつあつ

心や花さつあつあつ

人さつあつあつ宿乃梅

花よあつあつあつあつあつ

ちりてけいさつあつあつあつ

梅さつあつあつあつあつあつ

人さつあつあつあつあつあつ

いさつあつあつあつあつあつ

こころあつあつあつあつあつ

梅さつあつあつあつあつあつ

上

梅うらうらり雪と花

山はれ川を以柳風吹く

是ハあつらひれ才三ノ戸印共

句評とすしゆやん才三ノハ

いさゝ志有とそ

河色乃梅柳たぐい

家つて門と今駒ハきん

去草多し色馬柳乃陰

去れ駒乃公多ノ一但念ある

れ公也

尺くくらす海也

去草多し色馬柳乃陰

本几下原乃末れ去也

雪ハうとそよ白山た

白あれ衣もろ衣を物とす

是ノ才三ノ一ははらうり

白あ乃衣もろ衣を河川也

一ノふとあはれは記行也

此句才三ノ一は白あ乃衣を

衣を河川也一は行有て尺也

一ははらよはれ公やうそん

家評れ花ノ一鳥うた

清サ細きつひハ言ハ花ノ

評れ物乃行ハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ
紙ノ上ニ花ヲ註ルニ似テシテ
花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ
紙ノ上ニ花ヲ註ルニ似テシテ

花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

長生司

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

昔ハ花ノ宿ニ見ユキトシテ折テ

久し世を花のうらや中を独り
花の知中を知らず打たぬて心
をさすいれ也

長
花の志を中を知らず打たぬて心
をさすいれ也

去年うつら人へまれば花は
あつらひいれなれまへい

又やうらう花をまへまへまへ
志はしづる志はあまやゆむ

長
け二句世乃中のまへ眼あまや

花をくふれ吾乃びりよ本

世ハ皆花乃まへまへ方一乃谷
れ根本まへまへあまやうれあ
まやあま不及川

引あまのうらまへ山れまへまへ
まへまへまへまへまへ根本

長
谷乃根本れ花のあまあまま
かよまへまへまへまへ

まへまへまへまへまへ
まへまへまへまへまへ

自
あまあまあまあまあま
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま
あまあまあまあまあま

自
あまあまあまあまあま
あまあまあまあまあま

折ありてせしむるは恋とつゝ
やうよのそりかへかへは是れうら
と恋と成つらといはれぬを
長
は二句をけりや

友なき山乃とらなるる

大いれそくよせは花のしりし

向
深山幽谷へ命入公うと花よと

長
いふけけりもやまのけり

深山幽谷乃をかよとけり命入は

とたけり乃花よ人よせは恨

なりしとや

夜ふらとむし有ぬ乃月

鳥のけり花のけりよ山あはく

自
花よ鳥乃をすとすけりむし有ぬは

乃山はけりし中りけりしとや

花鳥乃声白ひよあけりん山は

けりつき月よふそ誰のそとけりん

うららけりしとあかりなり

山守しむるはけり花よ来て

花よあはれけりしとあかりなり

まんいりしとあかりしとあかり

けりしとあかりしとあかりしとあかり

花よけりしとあかりしとあかりしとあかり

いふそんけりしとあかりしとあかり

家知れとあかりしとあかりしとあかり

おりしとあかりしとあかりしとあかり

山守けりしとあかりしとあかりしとあかり

句のいふそんけりしとあかりしとあかり

長

二月くつしくし中をぬき梅
さしめや思葉をくらかき

山よりいづいづふじり砂金
尾上れさうりやうくかき

中をともり志賀れ山を

角

うし野ならさのれ花をさうり
花を吉野やあやしこもさし賀
れ山ぬきて花をれ便よやうし
心なり

長

花を吉野やあやし色は志賀れ
山あめゆく吉野もいづさうりと
中ら心なり志賀よ花をあはし
いつすまうりしこみ木乃平
年くれ花よ志賀じ吉野山

角

年く歳く花よのそ入ゆると今
いと陰遁れ心すれとかなくや
すしゆん

長

花んよれとやしく行く陰遁
の心なれとまなくや

世よすめいづこもまはれやう
岩れをさうらもさうりてん

又さゆりもさうぬん

花よとく白をさうり

角

まの山踏ぬ果もさうぬん
心もさうりさうり山をさす
花といくれあとのし

心もさうりさうり

花その心をさうり

長 こととさばり侍らり也
公也

あまのうしひわらあくるまの
とくしあひや花より花ん
よわら花の白いとまうとまうと
あひえんとまうと山乃花よ
わくさうす公なるー

められり雪いづくー
陰より花よ車ひきりー

めくさう雪大事也花とん車
よそりあせり雪い花れまうー

長注同

長 ありーいさー雪れ上人
陰より花階乃さうとまうとー

かほせりきい去年れー雪

玉簾や花れと山よ花さひく

長 花と云詞大事也簾ようじ

お山の花もやみけむ

長 簾とまうー雪乃れ外山の花よ

おしゆめや香炉窓雪捲簾見

いやりーう家公とそあけけ

長 花さうき小むめり山里

お中とと人の物そあけけ

長 けいじ花れ竹一村よ花さひく

自 け公の都をとおるいりり

あそいさばり花の中れ一村竹

よりしうさならしと打さる心也

松倚を村興野梅とい詠人云

いひく河を

遠村をく乃花のまゝかろく

雪とくぬい花のまゝ也

心くくく乃花れぬまゝに

花れぬまゝ乃雪つれく花独

ち記さぬ景氣もやなりゆむ

長乃乃雪とくぬ花乃まゝ也

ゆくふ花れ光の明くも景氣もや

折なりむじきいそふれり

誰に花より遠乃まゝ乃店

思意よいずしゆく云霧より花れ

外より草店とくくむじきい花乃

れまのこかしくすまらてき

くくいまもそよひ花れ店乃まゝ

訪人なり何人れとめいり花れ

ゆく人れとくんとおもはれゆ也

花より草店をあら草店なりゆ

ゆりまゝ花やいまおもすゆいこ乃

花も無音をせにきて何人れ

か人れ心の人や又何公有て花

折泳り心といひ白くしててく

ゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆり

さびしうくくくぬ雨を花と
志ししの公や山后乃あらうしと
去ら公をらんや

長
雨居して花とらよぬて花とん
ゆふかくたぬ氣味といふと
おのひとらたふし

長
花とせしうの果一宇よ
自
ゆら野乃様じー恋しき
ふよあやうくさうくさうく

昔あしあゆまをそとせし中
石とらぬぬさうくさうく
長
まの公といふしつんや
星の乃清のさうくさうく

自
業平朝に愛あくるきて橋の
よとゆくと勢いけしや清乃文
河内乃名取也

長
け句の清乃思れ公也とゆいあし
惟高乃をこれ物しよたりさう時
世中よゆくと橋をとらぬ

自
かうよしとふか古乃夢
むしあぬたいつとさうゆん
せいさゆんいつれ花乃夢よ咲友

同
目あようゆんさうやゆんゆん
まの公乃あつとさう

長
此公思くさうさうさう
心らすを夢といふも夢さう

長 長年 待つに花は空しく方い古く

自

長 毎に押さへていつたか
くすすも花はあふき身の上
みし似ゆることなほあつらんか
な〜と〜と也

長 長年

うつよなをよの夢をさう
このまゝ一方いなり花は又咲て
めらこあつてさう世もまた乃末

自

花はつとぬ花はよき花は乃一さうり
一葉一花は昨日夢も君恩厚
して千年をちりさうとて限
ならんや

長

け前句いひをぬ句も花は葉

花はつとぬ花はよき花は乃一さうり
とみさうり一盛いぬ花は乃一さうり
う花はつとぬ花はよき花は乃一さうり
つらん昨日花は乃一さうり
世中を観るさうもや迄さう知と

命はうらやあつて乃山

老ぬとく昔はつとぬ花は乃一さうり

光のなかり有花をみ花は乃一さうり

とみさうり花は乃一さうり

浅茅原花は乃一さうり

古のなかり花は乃一さうり

とみさうり花は乃一さうり

なくさあつて花は乃一さうり

古のなかり花は乃一さうり

自
らる人十沉思し悔つ思ふもや
あひ悔む一年は秋合乃前句也
長
是も一年連平合の前句也
何れ
おと沉思と世ゆふこととて
筆よはくかうきもみも人よ
これあはれ深きことなり

長
其れ未とこのむいふこと
花やう老よとらと世あん
自
家いふかくふと世をむむむ
あを花いふもの乃老と見ゆや
さては句と世あんとていゆや
長
おんかくほのまを其花い今
人の老とてなと云公老よとらと
又いつとむねうらさうけしむ

自
命ハクノ花イヤヤヤセ
長
其集限乃急かり公のま也 劫別
下句さすうとつりい悔りて 幽ま
作らる此物とをすゆ
長
十四字乃内よやうよとつりを
いひ忘る、風情りつりなり下句
を大切かりとと

自
里いあきて花のむむむむむ
自
四花れ花も人の袖夢ひ中
右乃花も袖乃あなふみ
自
心かたきき 誰かあうま
人並よ花もくくも草れ店

自
心し向し世をよみて侍るごとし
花とみらる人きりく心くかろく
花とのこころ人と有心のこころや

自
花鳥とて世に世にすまはるる
花鳥とて世に世にすまはるる

自
去来れはる花鳥のあまのこころ
うこそれおとありけり山居れ
名跡とてくく又あれは世に忘れ
こころきこと女せらるる公あはれ

長
新れ戸よ白じ花いよあはれいあせ
かめてをられうあはれあはれ
新の戸よ白じ花い下略

花鳥とて世に世にすまはるる
花鳥とて世に世にすまはるる

自
幽谷夕陽よ心とつたはれ
鳥乃き花よ志ありく春と河乃
よせ雨かな谷れ下る心とつけ
氣味深きむかひ

自
夕下言ふあはれ花よ風とく
雨とく心とありけり縁と人交く
うらりけり世に世にすまはるる

自
あはれけり人よあはれ下略
あはれけり人よあはれ下略

自
あはれけり人よあはれ下略
あはれけり人よあはれ下略

自
け心は花はよゆふくちのちのち
ちりてくく又いつか花を見る
一紙たしおるよ也 里とあはれ
尾上乃ふれとのうく行ふ
むくちりたりと云付也

長注 水空流し尾上乃ふれ也

世なりとさひとくやゆん
志ありく花は夕暮り
自
うたを山位のかきかき
あつたを一人あはくさ也
らそめふまゝ人いさひおは
志ありく花乃夕暮り見おは
おとさく人とおりや
きんじしはたさゆり

花を風いつらりしあつん
いつらるか花やよゆん
あそめくその世を花乃復く
世いつらのをかりふ花はあゆ
時を志をうつらふ誠恨たあふ
級乃あり世よ花はあそめく時さ
いふをうけかたりくささ
花をつみ出かり

くられ世とあふく公さ
ちりすは花をいつまふ
うたを日まふあか
あつた花よ人うちり
日此乃風をうけく限乃あは
と日あふくあひ心をさひ

うらむのふまてあゝ方と風
れ花とふかれ上かへに巻終
あゝあ果つきいそまら人の花
と人へ花とあひと也

まゝあて人れ恨いまわ

あゝいれ花よとてはまらん
か花風乃花あもさわぬ人の
恨いあらまゝは花をちりてん
てんとおつんの公也侍えとてせ
あ花れとて恨あらまゝおとあ公
いそと人れおとておりまら
あゝららら花とていそおりま
ら花れ人の公ありまら
いそあら花とていかりまら

目れまらあまらららららら
あゝらららららららららら

いそと人れおとておりまら
あゝらららららららららら
あゝらららららららららら
あゝらららららららららら

あゝらららららららららら
あゝらららららららららら
あゝらららららららららら
あゝらららららららららら

あゝらららららららららら
あゝらららららららららら
あゝらららららららららら
あゝらららららららららら

古寺乃為花乃夕也
長注サカ

山里花らり人々心

花乃色もあやふれぬ

花乃色もあやふれぬ

花乃色もあやふれぬ

花乃色もあやふれぬ

花乃色もあやふれぬ

は二句をゆるや

いほれ人そ公とつ

花乃色もあやふれぬ

花乃色もあやふれぬ

花乃色もあやふれぬ

花乃色もあやふれぬ

花乃色もあやふれぬ

花乃色もあやふれぬ

花乃色もあやふれぬ

ふんこれ乃落毛さしきふん

世平吹しふより色きから松風

ちりせんすい花りやうらん

うさりさし色に世平

まうれ花いつ色おらん

長まこれ花のまわさうあす草

いつきて恨とりさう色いかなう

ふん也 長平三句お花とて身とを
この次二載し

右平よりうさし小若れ松

自たふい若花なふう二まうて

花吹ちすまうくし右平

極平をサしいてさす

しく丹さおあはく品今い

強

うし花を家乃松風らわら

岑れ橋よ凡わきさうい

色くさう世平

橋花の色をいさぬ

自世平れさゆさう色とあら

花とつひ出す也

長周 松自注長注酒てよと一十進

長周 多奇歎 うみほくや

花の枝かとぬ凡乃よりらん

そふれまや何よらん

朝露乃澄れ凡ま花あて

自連平合乃付句也分別く

指り方ぬまわらん

詞れつき伝まららん

気連事合乃句也

いさよて今恨人言りし

心さうらり花乃山とせ

内あて心と海られさうら花

うねりよふやりのいさよ一

長 心と海りや心と海りて

内あて心と海りて下略

長 心と海りて下略

花うらに何の心よあらん

自 家こをやむ心もふらふあせ

よあわら色あ果りすてや

人あわらと色あ果りすてや

長 花うらに何の心よあらん

長 花といさよ海りて

山陰よとまふ心らうあせ

やまきく入月あせ

け平てんやけあせ

あせあせとて風れあせ

心とちうい花うか海り

内 ぶらうらと海りて風れ

とふあせあせの公也

長 風は海りて風れと恨らあ

あせあせあせあせあせ

内 山うすじきの花乃花乃

内 眼目あせあせあせあせ

あせあせあせあせあせ

長 花のあせあせあせあせ

長 花乃花乃あせあせあせ

行水源 きのこ西 凡の連 奇の
人必夏のこころ心得るありや
木くさ色ぬれぬかたに里
風くさやきせぬさよ花行く
樹陰乃落花れきりきりまら
長注同

舟跡のこころ徳のこころ
うすうす山花のこころ
長
うらやみ舟跡見ゆきんさか
かろく山花かすこころ
と舟跡のこころ也

ちんちんちんちん 花のこころ
荒ふた乃流るくたのこころ
引りよかり花のこころ

花乃流るよまれのこころ
舟也古のこころ
はなはなと見ゆ
引りよかり花のこころ
こころ古里さかるとこころ
心とつを可る

人よとくさのこころ
花のこころ
け句別乃息をなす
うらやみ花のこころ

里をさかすよ花のこころ
水乃色桃咲若れやゆき
仙家乃公也桃大いづき
よあり奇大咲華声流於紅桃

長
け二句抄及て候る人々

く山根来るといふ

あつさう八嶺に雑子と物鳴て

八嶺乃雑雑子いつとて之へあて

八嶺といひあややうなる歌乃言ひ

くらしつと也来るといふあつさう

夫とつと之の之 あつさう八嶺乃

雑雑の代よなるとあり

長江同根也未とてじ持り候

つとく八百葉よりあり 樹より八嶺に

雑子鳴るといふ物をれ新とて

くあつとけいあつといふ言ひ候

花を咲いつとれいふ言ひ候

花のわら鳥れまの長と

長
さうさう候るのまかり

人を夢人々やあつとて

信持し雲とて雑雑中あり

前乃連弄といつとれ山あり

と便あり候乃けの言ひ付候也

候乃句の雑雑とあつとて

うさう上とて人とて言ふとて

とありと付和とせり

胡蝶乃愛なりとて是人とて

とて知人と蝶れをといつとれ

むとれとていり谷乃下あり

自
越なくる乃れか河花とて

むとれとていり谷乃下あり

うさう上とて人とて言ふとて

長 じりあきしやういたた氷の海や

これいさすさう氷をわらさ

月 陸をく月よ秋もにぬえれく

これい霧ととゆらま月乃秋

長 涼さぬいサひすらなる

雨後の朧月桂乃を水乃邊

とすしゆや

おもさよは乃山のつたのかた

又や秘む蓋つむねる花

月 かつさう小恒の山のつたすれと

あはれ徳もさよと云よ又やわと

いづり

長 梓弓小恒乃山つたすれと

らじ法中はなとや

花の色は花さうらぬ葉は春

恒こころのれ葉よとこれ笑さゆ

ありさうくさむきをれ高

月 小くこれ花の月よぬ笑て

蓬を奏とくゆら

長注回

ちさの物さすむかひ花

月 山吹れいさぬ心さうらひく

さうら花よ山吹とさうらさうら

山吹乃物いさぬい真ありてさ

されさうらつた其曲かくぬ真

あつたかりと付ゆらぬれはさみ深

そつたあさしや春と世とれと

りりやあひゆらん

愚句老葉第二

夏連歌

了んやとん袖乃^の夏^{なつ}
 除れ羽^の夏^{なつ}花^{はな}衣^いふ^ふく
 袖乃^の夏^{なつ}花^{はな}う^うめと^と蝶^{てつ}乃^の羽^は
 う^うら^ら時^{とき}を^をく^く惜^{おぼ}ふと^と糸^{いと}を^を
 や^やとんと^とお^おり^りひ^ひを^をせり
 が^がく^くあ^あら^らあ^あら^らぬ^ぬせ^せと^と羽^は乃^の
 う^うす^すに^に衣^いの^のし^しら^らて^ても^もら^らい^いお
 分^わか^から^らず^ずの^の蝶^{てつ}乃^の羽^は衣^いを^をく^くせ^せれ^れを
 袂^{たもと}の^の夏^{なつ}の^の衣^いを^をく^くあ^あら^らは^はい^いら
 外^{ほか}の^の衣^いを^をく^く下^{した}略^{りやく}
 袖^{そで}乃^の羽^は乃^の衣^いを^をく^く花^{はな}乃^の夏^{なつ}衣^いを^を
 乃^の衣^いを^をく^く袖^{そで}乃^の羽^は乃^の衣^いを^をく^く

付やうなり春やとん人の揺る

玉川なせや月をぬる歌

冬に氷の垣乃ら木花咲て

玉川なせや星乃庭の氷を氷を氷

咲くは只無偏玉川乃里あきや

とちよ公也

見もせの流れ志くもきてくら

お花さける玉川乃里

きあようつらと玉川なせや

といやけ付やう今のあひらなる

へ

ゆらき垣がとこの心山里

信人の世をお花はるまをかく

あきまらるる柵し世をお花の

おのしせりせりせりせりせりせりせり
若木とやなほけり

あみくしらまきまきや世甲とよこ
山は若木とやのふや花はよき人

つきい老る乃森とあり
子祝行夕言よ月出く

昔向乃きといふ夕言や
月の出たかみし東海に老る花

れ時鳥古のしらまきまきといふと
東海に老る花といふは

老る乃とられ花は一
いふ鳥うぬよなき

ふかく月よつとむら
典訓付括乃は

鳥と時鳥よといふは
月と程はけ鳥ぬ

いふ鳥とといふは
名乃鳥の嫁と

まうといふ鳥よといふは
まうといふ鳥よといふは

あみくしらまきまきや
あみくしらまきまきや

あみくしらまきまきや
あみくしらまきまきや

あみくしらまきまきや
あみくしらまきまきや

あみくしらまきまきや
あみくしらまきまきや

系駒と其のあつらひの公せよ

何ともすまらむまらむをけ

なごもいとえやい出らんがきよは

細柳花の陰よくとくす乃

心とらして付ゆ也人丸弁とん

刃てしらすまらむや

うらねんをさききし

なごもいと山里とあわさす

くくくくくくくくくくくくく

てまらうくくくくくくくく

海山乃もなごもい家といけり

らひけりくくくくくく

長流洞同奥よけ向とい直よま

作也とい

月物あつらひの公とよなるか

くくくくくくくくくくくく

ふ月やうくくくくくくく

月よいさうまるとけりくくく

い月物あつらひとけりなかり

とあら縁よらうくくくく

ふ月やうくくくくくくく

物つらうくくくくくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

のあり橋をおとら一枝

くさくさすふ乃使らあやうよ

残り橋といはれぬ卯月乃事あり

らあり申乃酒とやん加登乃おれ

使乃もいれいありやうとむ

橋をたをれくさくさおとらあは

いれいありやうとむ下略

卯月中乃酒加登乃おれ使らう

たうい臨時乃おれ十月中酒や

今一のうら鳥乃記なら

神山乃記に未れせとけく

色乃記のう卯月酒の日御神も

記といふらん未乃せれ取合也

日記をくく記し未のうら

あまひらや神乃心まひらん

日記と記愛乃うらうらせりあは

うらうらあは

神山乃記乃養をくさうら

くさうらあはくさうらうらうら

養草野照日ハ神乃あまこくかき

さすくさ先をひらん養ハ日よ

むしうらあまうらあはれいあは

神事も近づきハ養も神よまひらと

ま心也あむれ日記とくさくさあは

よらあせり日記といはれ乃うらや

神山れ乃の養と下略

あままこくさうらあはあは

あまあはあま乃あはうら

見てこれいふはむねとてりしれ
とてりし月れ盛乃とてりし
句乃心ハ天道名満乃理とてりし
作はハ二とてりしれとてりし
照月乃後名しててりしれ
といふ心とてりしれ也
長
天道ハとてりしとてりし也
皆け理とてりしとてりし也
いふ心とてりしれ也

外面乃標月とてりし
水鶴なく庭れを水鶴とてりし
月と本とてりし水ハ独とてりし也
本とてりし水ハ水鶴の鳴とてりし也
標とてりし水鶴時節とてりし也

とてりし袖乃とてりし
系物ハ水ハ水乃とてりし
駒ハとてりしとてりし水ハ
とてりしとてりしとてりし
いひとてりし駒ハとてりし
とてりしとてりし

枕清ハとてりし
水ハとてりしとてりし
心ハとてりしとてりし
二句又とてりしとてりし
めぬ事とてりしとてりし
とてりしとてりし
河上ハとてりしとてりし
とてりしとてりし

中乃果南と句乃公しすはるや
長
子苗れ未よあれあはるとうき
まよとぬとや

去年より花と草よ又咲

橘乃よあひとすきぬ新古く

自
旧誼へ立ちてりとう橘とぬは

志のよましアふ咲さうあられ音

とすきぬ新とふおとせりよ公也

長
去年より花と草よあはる

あよ又咲と古れ新とぬ草とや

とすきぬ新とふおとせりよ公也

橘と人ぬむしや志ぬさん

山ほくくさけあふと妙さけ

油うから花と草よあはる

おつ色の油とくしん梅花と橘と

色とくさるれと何乃奥のゆきじ

さりなすあはくいんし句乃恨

はりかくくさあはるふよさうあさ

じくはまおろ色あはるいし草

よいのせゆん

長
橘乃言と可きれと点と橘さ月

かきさるるー

朽木よ油乾材乃す点

橘よちりきやあはるゆきじ

自
朽木橘乃やちりきやあはるゆきじ

いせ丹乃庭也家よさうあはる

分よと橘よ棧古事いゆきじ

とくや

朽木ハ楠材ハ更升ハ庭方ナリ

入古新色ニまき雲よかふた

下房深一標さく高

色ニまき雲をさや標乃縁方久

まきみまらりや

見しむらりや

むらり店ハ更ナ朽方

六月毎ハ小田ハ赤ぬ滝ナ色更

取中乃赤ぬ滝店乃赤いつ色朽

まらん小田ハ川赤ぬおしれら

まらりや

六月毎ハ小田ハ赤ぬ滝乃赤いつ

まらりや

小田ハ赤ぬ滝乃赤いつ

くらやいむらん六月毎ハ

これハ赤ぬ滝乃赤いつ

六月毎ハ山凡おろと小野ハ里

又月毎ハ山凡秀句也小野ハいつ

まらり赤ぬ山ハむらり

早ん見るといふむらり

小野ハ赤ぬ山ハむらり

まらり赤ぬ山ハ六月毎ハ山

凡秀句也は楊渚ハ小野ハいつ

なく赤ぬ山ハ向いつ

さけむらり

蚊を大ハむらり赤ぬ山ハ

中ハ焼屋ハむらり

無むらり

公らるるをその村の西へ向ふに
おひろくんとしとてしるや
政を大にぬよ何ぞの事伝を感
てさうくさ中ととせり公を何ぞ
よそ乃じくぬや

泉ハ 林へくれぬいらそ

夏ハ 林ハ 雲ハ 死と云ふんて

泉乃 色ハ 林ハ 言わるとせり

ふりおいやま交也とほるれす

秋とて公也

風うくをみお川乃夕言ら

以後う夏乃走りたりけりけ

公うつくさうつまうや

イのいあひた乃事さ

つきくく雲花林夕中とよ

公らるる物語乃付かり但業平

心いあしとせりなれなれみと

かれと信うや思ふに只今雲ハ

と夕周よじく彼乃乃夢ハ伝

流りてそれよの信ハ長とらと

付信者也

い世世は 死はさるてぬとてく

いあしをい林ハ 雲とてしるや

とらありせりゆれ 報を 雲ら公

せりいせりくや

物う鳥乃く急くしてあは

長 公らるるをいかなとせりあは

前向人うくや物う急いんて

とゆふ雲と對一すうかろし

内もかくみろそらら来隠し

自 ぞひしといふぬ出乃あつこ

自 いつまのうといふぬとの對句や

とていふや

よふかく様れ風うきすら

自 かく出とゆる言やとん

自 雲火乱死体已近とゆるや

必しとていふと句とあうらよあ

雲火乱下略

月ひよこそああいせ

さゆいぶがぬそりさう捨て

ト せとあすらとらさういこそと麻

れつくくとまららねと月乃出い

とそふ月とあいせぬまこと

とそふ月とあいせぬまこと

とそふ月とあいせぬまこと

とそふ

おすおつとそふ下略

益雄の照射は出た後乃あ

とそふやとそふ月とあすん

とそふとそふとそふとそふ

とそふとそふとそふとそふ

精飼大座乃とそふ月表よ

えとあおとそふとそふとそふ

物人と座とのすちたそふ

たそふとそふとそふとそふ

あらくれわらとそふとそふ

自
うらぐとつひの又文字に廣れり
つと秀吉乃公女にせしむるなり
その外はうらぐとつひの又文字に

如^七此教生の教同しむるなり
ハ夏乃長の景名也

司下ふう紫山に
大串とつとみぬぬこの長ハ

出^八すらうとつと川に
横川とつと長川とつと

横川とつと長川とつと
多^後く彼ハ横川長川公得るなり
むあ^後く長川とつと

有
照月とつとつれ
月乃とつとつら
おひけら

引とつとつら
月乃とつとつら
引とつとつら
いふとつとつら
引とつとつら
あそ下

かなく表ことハ桂
さよとつとつら
白とつとつら
引とつとつら
つらとつとつら

とつと古今乃平如んや前向じら
うき向やましくゆらうとつと
白妙乃雪れん山と對してゆき
いせこれゆらうとつとせせせ

山れんうすくさたじゆ

夕風よ静く指あせりく

夏れ雨はれ景氣くや山をうす

かと蝶乃ふせうく

世はれ二氣うらうらうとまき

うすくやんれまむとせんと

野急れ色乃のたつたまき

花よかり瓶乃夏草かへり色

白妙れや乃ん山時節乃氣れ

蝶かく指瓶乃夏草さうら色

あつ神と書あつじら者也

野急れ色うらうとつと瓶よかり

花よ一ゆりのけりや

夕風よ静く指あせりく

夕風よ静く指あせりく

は春よやどの色せりあつれ眉

あつとあつとせりあつれ眉

夕風よ静く指あせりく

花よかり瓶乃夏草かへり色

白妙れや乃ん山時節乃氣れ

蝶かく指瓶乃夏草さうら色

あつとあつとせりあつれ眉

夕風よ静く指あせりく

あつとあつとせりあつれ眉

長
夏とりのしらぬ水三月のそ

松風きりりしる三月の新

夕立よ大津白雲を穿てて

山乃夕立名残すこころなる意な

たらしし六月のそ白雲のそ也

とぞしられ里乃標のそけりさ

山見れば夕立しるしく吹風よ

心は夕立しるしく久このそけりさ

しりやよ雨風のそ山と梅海

夕よ海よしるすやゆんしるしく

くく山よせりし也

市よ夕立しるしく

大れ玉も山よけりし

と云身也も標の系乳乳さけりき公也

夕夕ハ波の枕よ松の風

水乃上あや夏を運ん

流よ松を舟としり納涼うた

流よ松しるすしり納涼うた

くく山ハ波のそ

新あつし西日よ

夏れ西日よ

くく山ハ波のそ

たをやうかりし

新あつし西日よ

夏のそをかりし

夏よハ波のそ

夏日者よ日よ

らるかりし

かこやうかろの和あり公うろく
厚敷と有りなをうろ下よ移るれを
天く移いとく定く色

あきつらあきのまじりちり

自 月と月のあらし雲は涼く

雲と月の衣よそりせり月乃

こくくさく涼くや

衣の衣と雲れ衣よ夜をして

雲乃衣とあきつら月乃あ

さく涼くあ

又く移るる鏡れ形と

玉鴻川乃月のまじり

石とく鏡とく玉鴻川乃出也

但れ移りいあ人いさ

長 前句大事也

長 前句大事也 鏡は川よせ

あらしや

涼とくや知出れあ

まじり泉のまじり月ま

自 の中川乃とそりよの出れ

ありと書ゆあつたけと

そのせとまよらして

長 句いさあゆる

泉乃知りれ月よ出れ

すくや彼相流中川乃宿

まじりや

まじりはれをあらうと出

なれを涼く星の人の宿

角
家やこれ外よりなる様の家と
中へ行く事おわくつよきり
長
家や乃かゝるよとるをねん
さかすよとむまいさうけり

林こゝ人れう地うくれ

角
桐の葉乃下よ風待夕すこ

林鳥梧桐葉落時こ人こ

う地物ううゆれ夕をれ涼さ

更よあううゆれと涼さうを

長
好いさや

竹根とさう公まわく〜 婦と

うさ地う〜ととつ〜のまをりし

林鳥梧桐葉落時う地や

母らて涼よ〜と〜か

角
おりさういけをり流れぬ松川

角
おりさういつ成龍す〜ととつ

角
おりさうかろ〜に河後のまをり

角
おりさうかろよあまらま〜つ流れ

角
おりさう〜と公ま〜あまよ

角
おりさう〜とあまよゆれむ

角
おりさう〜とむし〜あま〜

角
おりさう〜

角
おりさう〜や西れ川〜は後ん

角
おりさう〜と〜は〜

角
鳴きや〜力下略

角
おりさう〜と力よあまらま〜下略

角
人よ〜してや力ま〜のん

角
立ち〜流河後〜かや老の夜

いさ之行未も久しう人々今
日れは後いとり也う紀すう
先の彼乃の後川よらまひ
作んは神れ世すんはは
長老は乃述懐御後のもす
うきり侍

愚句老葉第三

疎連歌

うらりのめよまふ三月
あつさう来らうる疎の来て
上結らり下結乃月まてと公
うきり也
上結下結乃公也や秋巻頭乃
公也

いつらまひなを古里
柳らさおれ川風と物吹く
いつらまひと物疎風吹
てんや古のまひと公なり
いほのまひと物らと物疎風
の吹れら古のまひと物ら

蓮のふくはあもさるる

日くく鳴夕風は月如く

蓮の房は月れあひさるる

日吹れなくもそりあつめさる

景は下はもれい中へ人の心也

蓮の房は月の中をさあもみ

しんたをさるるや見れ

極たふく

夕はれい蓮れは葉よ玉こく

涼くかりぬ日くくれい

扇のうさやさう心

夕はよ天れ河東の音とく

扇をよ向れすうれい天川の音

几魚してさるる物とせれらけ也

天川扇乃風は音と玉こくを流

とららうの松は舞ら向はうれ

天河扇れ也下略

さくおれ糸とより時多ふお流

望よ手向乃扇れ玉素

前向の野も臺乃し也付お七夕

れ手向乃物なとらぬ海うよな

さくおれ糸引くたをとり事

あまの母のひらり地也

前向野も臺乃しや付ら公の

七夕およ手向乃物はぬらう

さくおれ糸引くたをとり事

さくおれ糸引くたをとり事

さくおれ糸引くたをとり事

夕ぐれのこゝろあはれぬ様まで
しらべよ風あはれぬ言のこゝろ
あよこゝろくまをくま也
夕ぐれの色こゝろあはれぬ言のこゝろ
あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ
句の直よすゆり

かくまゝのこゝろ山里の歌

さびしきこゝろの萩の風は

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

柳や風はまをくまをくま

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

あはれぬ言のこゝろあはれぬ言のこゝろ

唱と初をし作り作りと向れ色よ
し作り作り

長 ちのちの山よ月よ花よ

山花らり花れ河のち初て

標ちとすれ身と知ん

自 朝ふよ公みしけり草れ店

草店をふ極至る朝鳥れ親

心よとすれり馬と色作り

長 け草店よ何人権と極てせれり

なとを親まるとち云也

朝ゆあて身れ秋の葉

自 朝ふれ花を権とすん

長 ちのち身れ心とちりさるり

朝ゆあて身れ世とりすも花を

権と極まるとち云とらりり

心よとすれり馬と色作り

自 ちのち身れ心とちりさるり

長 ちのち外よ何れ色作り

心い時也

朝あつりりそ妹はれ色

自 朝ふれ花のうと身とるり

長 朝あつりり身はれ心とちり

朝あつりり心とちりさるり

長 朝あつりり心とちりさるり

朝あつりり心とちりさるり

朝あつりり心とちりさるり

朝あつりり心とちりさるり

朝あつりり心とちりさるり

おのれをいふ 萩乃一平

自 花すきい袖をきよくもまほし人
聖を乃人こころよまほし人
白くくくゆふをくくえ
長 萩乃のさばるる

あしとて 妹のまほ

山きく月い入おれ花を記

月 花を月乃を花よむまほし人

わくくあのをとほら方けし妹よ

花れ平書んてあしとて

おのれをいふ 萩乃一平

いしとていもまほし人

妹乃おれあしとて

しとていもまほし人

人におれ尾上乃おれ花を

おれおれとまほし人

とていもまほし人

おれいもまほし人

あしとていもまほし人

村由より色おれ花を

人の花とていもまほし人

あしとていもまほし人

月 先年貴亭とていもまほし人

白くくくゆふをくくえ

作りつらん花をくくえ

給侍すまてそのおれ花を

おれおれとまほし人

おれおれとまほし人

くろりしとくましく

二向又公助也人の泣と又恨しん
の葛の庵よりうみけ彦人の泣
とくろりしとくましく

来れ世よなきいみじくありて

じくしぬれ中乃妹也

何あやもり泣おしれあすま

か涙あまらあもさくせり

とけり涙割あもせりり時より

とくろりしとくましくあつと

きくしとくましく

長 荒れし中乃妹也のさゆり下

かのあまら世の妹の白顔

よと月あつと夕言の如

平原秋樹色 秋麓暮鐘色 岩

れ風景ささくして鐘と月約

長 しく伊ひしく

公のめかり鐘と月あつと

河や夕陽暮鐘れとゆり

夕言ささくして妹れ山

さのりか指の月と鐘鳴く

思向の中さく可ぬ板と中

さすさ日新やさくしておん

光と月いと恨とのりる

色りきよあまら出れさ

月新夕あつと夜庭

あまらいとく月よあ

出れさあまら色乃ら

中りわを海あきらけり

けさ海草よ及び石と庭れ

月よ出未染れわひらと海草り

とつりれ鏡乃のきいりしや

と秋半乃の緑のよと月

公のわらうのちり

水の神よとら月をさうとこれい

こくし而緑乃とたりさうけら

公の也

お染よ海と庭のみにきり

月中の庭れ岩恒あまきり

そのつらりともり

中すそ水い帯り月すそ

山向いと并命よ出り

雁過長空影沈寒水雁を遺

蹤憶水去沈影意のな也愚

意又自然乃理也平等大惠園

ようふぬ駒りやいとゆん一葉

善提駒鳴平等大惠園

水は月とやまん公とゆくとん

おれとをのつらりともり

けさ海草よ及び石と庭れ

月よ出未染れわひらと海草り

乃也

日よれとれとれ

舟とむら入江の東月出く

日乃言くくくく

れ海上よ月ううううてひさ人

おりのをかりたり
江東日暮雲

水の岩つとまを
あつた月長の夕垣つら暮
心ゆや

心うきく人いあふれ
あうてとりや月のよひ友
今も心えあういあふれ山は
友とあふよおうちまうと云や
山はれ古事友とあふ心今
古りといらあや

とまふよとあふれ
垣戸や月一箇をよとて
あつた月いづくいあふれ

あつた月いづくいあふれ
あふくあつたあふれ
あつた月いづくいあふれ
あつた月いづくいあふれ
あつた月いづくいあふれ

あつた月いづくいあふれ
あつた月いづくいあふれ
あつた月いづくいあふれ
あつた月いづくいあふれ
あつた月いづくいあふれ

つゆのつゆり

長
晴る朝のほし。川の流れをうら
り。つゆのつゆり。乃あすのつゆり。
けしむのつゆり。毎句ほれのつゆり。
つゆのつゆり。つゆのつゆり。

つゆのつゆり

長
西よつゆり。つゆのつゆり。

横
横言。東月の西よつゆり。つゆり。

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

つゆのつゆり

何れも愛れしもの公のうら

都より月におきてあはれ

千句のうら乃句也公のめ

公のめ也

公のめ也

都より月におきてあはれ

千句のうら乃句也公のめ

公のめ也

都より月におきてあはれ

千句のうら乃句也公のめ

公のめ也

都より月におきてあはれ

千句のうら乃句也公のめ

公のめ也

都より月におきてあはれ

千句のうら乃句也公のめ

公のめ也

都より月におきてあはれ

千句のうら乃句也公のめ

公のめ也

都より月におきてあはれ

千句のうら乃句也公のめ

公のめ也

都より月におきてあはれ

千句のうら乃句也公のめ

公のめ也

都より月におきてあはれ

千句のうら乃句也公のめ

公のめ也

世れうはあつたをきかして
なまの月よのむかひ
月よのむかひはあつたをきかして
むかひのむかひはあつたをきかして
あつたをきかして
あつたをきかして

いんそくおれまのきかして
あつたをきかして
あつたをきかして
あつたをきかして
あつたをきかして
あつたをきかして
あつたをきかして
あつたをきかして
あつたをきかして
あつたをきかして

おひひくま下

あつたをきかして

二年りやうはあつたをきかして

あつたをきかして

あつたをきかして

あつたをきかして

あつたをきかして

あつたをきかして

あつたをきかして

あつたをきかして

あつたをきかして

あつたをきかして

あつたをきかして

あつたをきかして

晴より降りて敷山影ふれ霞き
くともり雲さうやいふれ

心 ^心 成れいせひそあふぬ山さ見
いつ色れそ乃霞よりあふん
たとのをいや林の月あふるさ
又よ霞れつりたふく又云霞
れ月い又よ霞れつたふや曉れえ
すましくいさ月れさうや如行
一敷よからい宵曉乃さうや

むすのよ林れき日と送るん

長 ^長 かり末くれ左の月

は下向ち切乃さうやいつしく地
流乃次よ云出さうや林れき日と

送るんと前句、精粉いせて
うや末集れ左の月西とさ
やとくくしてまゝも集るや
けんも直よさうや

待たれくかそとまゝいれ

山れんくし月れ入さ

よくさし侍るや下れ向よい松

飛れまきさうや

心 ^心 の也

心 ^心 ころす好風う吹

なあまいあさ月よさうやえ

秋れあしこいあさうて跡くあ

そ月よい身やいさうと云仙也

花 ^花 も志 ^志 ともあさうしく林原

山とこれ月の御身村きて

自 林の御身月花家乃御身

文のれ去きんそおやすしを

七 秋の御の月と花身村温ま

流つひろんそおやす

心と中しすあれをけと

自 舟合せし名所わればおあ

心と中しすおあれをけと

さこいらそあちよしと

平の江都ハと碓の風

下紫ちら松の月と出鳴く

自 松の月と下紫あくとあ

出の言いと野らんくと長あゆ

るりに都まれいと碓の風

く江ののこかりとやとく

自 旧都の詠さそし力あゆ

け句の直よすゆいと不分明

郡の松雨くよ松と下紫

友出しと出れをすとす

くやよのつよの推をら

あそこれの乃花乃系村

自 夕風よ出れ言まると里

寺の垣のそあすあを江

村よ出れ言出ると公也

碓の乃尾花吹しく風

ありらそあれ出れ言

袖よんらと江の碓の碓

出れ言よゆくと宿

得 河 碓

七

戸
此れ者よありとやすすみくせの
や流の味をそくく行くま
なれおとら公也

長
け二句又心河艶しくて出れ言
よ新方そくくうふひのつれ
いふあす

命をく限れわすたるひん
原はあより松けれ公
そのれ松虫のなれ名の有る

とらめく竹ゆり
公のゆも深長鈴出れ老ふ名うけ
さういふ今れ程とふさ出さ

あうんき公よまうせて人さぬや
山よりけれ松虫の思ふあす

まぬとすく公わり思ふかじ有けり
の襟れ身よすら世中

松虫乃ありよ今年もあらひく
花をけこよとえんや下原よ
なまらけいふくくもらん

長川弄岡

さうくさうく長れ風のひさ

自
さうくさうかかぬ月小あうきて
月文ゆきの庭上れ落くおあやり
や寒空切もくくく公也

初君もうし居乃かく公也
あうらそれぬ格色つさく

自
くく山さこれ味のよさじれ時節也
け二句又公也落らる長のさす

后川来りて此れ意氣よ公とあ
てと侍りしや

房吹くかたもこれ体風

夜ふ月乃山里夜はあく

樹蒼くしてあまのつら

夜は月すきてあまのつら

うつらふ山う袖の色なら

白妙乃夜ふ月あく

ふらふ山う袖の色をわ色に

白妙乃石乃月よしらとつらと

あまのつらと

白妙乃夜月れ光ふらう山を

袖の色ともや持たれえらる

夕鳥の天をわたり

緩りわたりて 祿是あまの

小山田の鹿とよ鹿を

よ鹿を山懐くうう

あまのつらと

山懐くうう

小野れ夕はく 標の風

小野れ夕はく 標の風

て唱なと原成地後く

よ鹿を

よ鹿を

よ鹿を

よ鹿を

あまのつらと

自 居乃をく堀江に沖より見て
 難波と云ふれりなほ松浦舟
 中んをとりて楫をさす
 かの曉りくことかきつる月下
 鳴るる人の夜をりつるや
 引くふく堀江に舟を松浦舟
 うりきくこととてやまら

堀江に難波浦は也居をよより
 鳴りつるくれ池乃を雲け

朝日すす塔の雲よ居をりて
 云名れ島よ名高塔も也但云
 鳴るくことつるよそ中乃居をり
 池乃を同じさハ塔乃雲よ朝日
 して居乃をりつるよそ中乃居をり

あつるをかりや

都れ塔も雲の云と云

自 居のそくを山つる甲て
 雲の云よ山つる縁とたよ
 ながく山つるの曉乃雲の云々
 長注不遠

吹風さし 廣川乃株

居れわらけと芦乃花朽く

向石れおよの心

枕をささぬ月更て
 舟よ居をりあつる海

自 旅泊乃さき月更けり
 雲あり曉朝居乃一舟をりや
 出くくや居れをりよそ中乃居をり

いづたにれりあそならん
あつらふもたれ月まで
^自幾夕等と一確れ程は行方
出りし物らうつらあそびの
^也三句又之しつらまうたつて
居るは旅泊れ波枕さあそび
あつらふのさるや

小これ松 疎せそあ
里まなきいふは月な鴨鳴と
^自宿はなかくして物さを里も物也
^也引なる馬のふのさあは有る山
夕まうらふらぬやいかにして
一陸鴨よりり
くはいかりれ株とそり

^自舟はこれいふは鴨よりうたふ
なるは方あまたあつらふら
いひ物とそく表を分りて
今れさうさうあそびあつら
あそびとそくやいそれ物

^自野は小倉さあそびあつら
さうらとハ野せ乃人れさうら
そりあそび

まはさう野よ人を休ぬ
うたふは鹿さあそびあつら
^也鹿さうそ月を物人ハ野亭れ
花よ心をさうさういつまも
休ぬと物也

作りぬ句れさうりよいなを地
なす

くもれなすふつこれぞ山
鹿もかくまきよおんやあかん
くもれ旧ちすなをいよのうあ
くくくしてなすや

けさ句いつきてんてつらき色も
れきさのまよあいの鹿は旧くや
さるのくこれいらまは句は移る除

人れさうりのうら世中
碓しいいさる町をくさ書
一句よ百句付の節句くやんは也
長住ゆあ

力を候よかして袖なまぬ

岩本とくくくも碓れくさ
其はあら也

岩本も碓のくさくはは力と
候よかして袖なまぬ

夕れおと表たりたり
力おれまむむよまれ碓れ色
け表の感なりくまれとつら
いおくさの碓れ深うんの心也
げ表の感なりくまれとつら
お熱人なりや

くもれなすふつこれぞ山
鹿もかくまきよおんやあかん
くもれ旧ちすなをいよのうあ
くくくしてなすや
けさ句いつきてんてつらき色も
れきさのまよあいの鹿は旧くや
さるのくこれいらまは句は移る除

とあらはれ者を知人とす言ふ
遠方より来りて下略此等乃
依者たをとうりてはつらう
とらを心とらうりてはつらうや

月とてはるるよまわらぬ袖
うくつるきほれ何おまや
自 棟といふたれはあつ何半れ
仇なりとやせりん月とら
ふらに心あらはとあらてはつら也

いづく家あつはつらとらう
自 うつとておまの棟とてま
とらやすとらと命と人毎
とらとてつらとらとらとらと
とらとてつらとらとらとらと

のいづく家あつはつらとらう
自 風とら棟とら本とらとら
棟とらとらとらとらとらとら
何乃草本とらとらとらとら

誰と油とすまらとらとら
本の上とてはるれ命とらとら
棟とら四方よ下略けつらとら
なとらとらとらとらとらとら

自 原と本と草とらとらとら
何とらとらとらとらとらとら
何とらとらとらとらとらとら
草本とら乃合際とらとらとら

たらとらとら
公いぬ也

有りけりけりけりけりけり
未未未未未未未未未未未未
自 枕園又権文院に下り住居し
しつ今古交々たり橋のあり
さむくま公也

枕園都より下月注同

月乃入宇治れ山本おさけ
自 推乃案一不乾器の味は
宇治よ推保氏抱後より出より
奇合也わく時帯れ景氣む
くくくくくくくくくくくく

宇治の美よ三也

つと家さふいと公とまうん
松れ下案乃味れしりあ

難面ハ模公とみさらいあれんやの

うららさわりさすまんおれ奥

まはららとこれあ乃下店

山居れ人まいつとあきまはれ案
れお案すらしりありさあは
ゆみくえくはけさ乃らしし者
神くおさかをくくく折言ハあ
おたり着るまれとくら山れ推案
のくくおれ松山飯マあまじま
ゆりなうく

あ言とくをれ川つ

自 舟のわら味れ山がくくたりて

水麓暮鐘声乃味れ景氣
けふくくのせけん

心いぬ也河邊乃言後乃みり山
本の旗乃風集ちる

おしひれ々ちりそれとあま

自 承さじちたさこれ垣金乃旗の言

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

旅人よききと垣金乃み垣金

旅泊りて灘乃垣金れ々ちり

旅泊りて灘乃垣金れ々ちり

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

おしひれ々ちりなとつさすとも

三句抄より南条の氣丸
公と付ゆ〜也

親とありけ月乃を表と也

自 妹はくやいおれまふらあひく

自 昔句ハ日敷乃又日を色と付

おハ襟乃くおれえつ〜と云也

妹いあら公見まふらのお家姫在

秋うつらうつらぬ山乃さ〜と云

在時の月をとれとみ〜さん

公ハ妹をうつらおれえつ〜と云

妹を〜してま〜と云〜

人れぬま〜と云〜

よあらと云 怪よ〜と云〜

て〜と云〜

長 大切よおりの侍て〜と云〜

元日乃月と名おれえつ〜と云

よつ〜と云〜

な〜と云〜

人よ〜と云〜

立回れ止る妹れ〜と云

お〜と云〜

自 公ハ時也

お〜と云〜

長 ねれを〜と云〜

公〜と云〜

お〜と云〜

お〜と云〜

長
立田山よりれお紫乃をこしてそ
松のくまぬ物とくまぬ

本れるよ白紙おくの御波

大井川未いあ〜よお紫して

白
流つりら谷れ小川乃をつりら

不紫や水乃町ぬたうん

水よお紫を〜とく大井川

む〜くみゆら流れ〜と

大井川ちるお紫よりり〜と

となせれ〜と〜と〜と

河水れお紫〜と〜と〜と

洞ぬや大井川乃風京言録れ

さ月た〜と〜と

井〜と〜と〜と〜と

何よつ〜と〜と〜と〜と

是とらん彼と〜と〜と〜と

力と〜と〜と〜と

いれ〜と〜と〜と〜と

さのよ〜と〜と〜と〜と

世中乃盛裏と〜と〜と〜と

長
流〜と〜と〜と〜と

け向〜と〜と〜と〜と

盛裏れ〜と〜と〜と〜と

人〜と〜と〜と〜と

お紫ら〜と〜と〜と〜と

お紫れ〜と〜と〜と〜と

〜と〜と〜と〜と

赤くもやと付ゆり

くちね 林れ倍の用けさ

お茶らる江いそりる春は

貴亭くくすあはれ一花の内

くや向よの長なり

都といかた秋よまきや

お茶をりさき一菊とゆり

白しはさ菊とまぢるさき

茶とさきとゆりゆり乃山と

そと秋とさきとゆりゆり

心いみじくもまてくやお茶をり

心とゆりてはゆり

ゆりされあまのさきとやあかん

さめゆり一菊れはなとくち

九月九日一日ハ上下ハなれて菊

とゆりさすゆりさきいささき

ゆり垣内なりさきまぢるさき

ならん又墓のさきゆりゆり

ならん又墓のさきゆりゆり

ゆり

墓のさきゆり

ゆりゆりゆりゆり

いつまきく草れ露の世甲

力をせりゆりゆりゆり

黒髪今ハ霜たれゆりゆり

黒髪今ハ白くなるとゆりゆり

えんさきなり七お茶よゆり

清ふゆりゆりゆりゆり

け二句又思しゆらやらん今
ハ書きたと詞つさ敷やゆき

本葉なりし 山川乃末

とつたなく筆おしよ様と

いとそくし記本くしの風

志やさゆあらんさぶよ様言て

おりの入身いあらんこれ様の島

よめり未やこくく力風

長引垂しおれ

康れきし物なるをりて

様ハ時ぬとなきこあうゆ

業やれを六鹿の言と様ゆん

れあしき洞よせしうき其は學

たもこくし時ぬと様れをこや

りくしとゆりもやぬしを言

ゆよ様れハ文字とつら軍方りて

いつくよりえうに様れ立ぬん

今日とくしりれ長月の言

九月たよいつくれ人乃うらん

いあよ家よ書てり様れきんを

ハ至極なりし様れ知ゆん也

九月たよいつくより又は秋れら

下人としきしとすすとおりのや

かたり

思向老翁年四

冬連歌

さしきりたり神垣色

山風と室に枯冬をうらて

神垣のまじりとほらるる社乃

心也名取よいうてあふくすは

句の名取也多と云字をうたれ

枯乃冬枯めくわいしつ物也

さきとる神垣とあるふ吟味は

神垣に三室乃山よ新む色を

いしきりたり神垣とありて

神垣のまじりとほらるる社乃

心也名取よいうてあふくすは

句の名取也多と云字をうたれ

下略

自
本れ紫乃ちるさうりく紫し
友しとけいさうしなす
度ととかりふ也

又みら愛しやん是方り
一年の危乃あしよちる本紫

命まら身よ吹向い相係
今まら身よ本れとちり山

いく交り毎の店のうらん
志くれあわれの曉乃し念

さかしくむふ埋大けと
きつらり町由愛れ係し終

自
いつととんてらまてなぐし
けみ句思しとらまてなぐし
感傷あさうすし味あうし

自
本れしを紫のちりよ月出て
かす句れ母てよあふ也

自
寒さあしよちる冬日
あまら橋の枯葉れあやうて

自
おしあをなれ枯葉れあやうて
いしあをせういつらゆらん

自
あしよちるといらちやあな
れ枯葉れなぐし

自
け付しあふし
氷さる水い駒さあす

自
親しむさあれら川乃夕波
あれら川よ駒あく

自
あれら川よ駒あく

とあはれ氷は氷の跡すまふ待結
氷は氷の跡すまふ待結
氷は氷の跡すまふ待結

氷は氷の跡すまふ待結
氷は氷の跡すまふ待結

氷は氷の跡すまふ待結
氷は氷の跡すまふ待結

氷は氷の跡すまふ待結
氷は氷の跡すまふ待結

氷は氷の跡すまふ待結
氷は氷の跡すまふ待結

氷は氷の跡すまふ待結

氷は氷の跡すまふ待結
氷は氷の跡すまふ待結

氷は氷の跡すまふ待結

氷は氷の跡すまふ待結
氷は氷の跡すまふ待結

氷は氷の跡すまふ待結
氷は氷の跡すまふ待結

氷は氷の跡すまふ待結
氷は氷の跡すまふ待結

氷は氷の跡すまふ待結
氷は氷の跡すまふ待結

氷は氷の跡すまふ待結
氷は氷の跡すまふ待結

都とまじりてこれぞ山

そこのまじりてきき山寺の鐘をきく
涼氏地流るやまのうらむれ素極のれい
き山ちる乃のひさかたをり六条と
しつらや

いふとあふちるそふきつ流る
まのちうとそふちるあふせよ

長江河弄女しよにす平れせよ
こそととしらひましくあらしやが

うらぬらうらひそりそふら

長
山水の月をむまよふ猿鳴く
又くくらひりたふし

風いさ枝とまらむし行
左のよ電ちりらよ月すて

竹よ雲はのゆらんまれとをり
連弄乃中よのまきうらてしを

長
竹よ電ハ流も奈すらなまよ由極
更よよれつひ乃るまあす

こころしふかしの流次すれ流風

か
さしあれや屋の月よ縁ききて
源氏物語の源すよ萱屋あり公の

長
流す乃若金名取同而をる
いさくこあうわれいさき

流す乃若金名取同而をる

都の月乃そののちりら
河原風千鳥鳴きあふく

あふれ白のすけよあふく

波の立居くつし浦也

千尋なくし海。磯よ舟あり

舟ありしを清くしそみなり千尋

しらぬい波れ公たりきり

此平れ付いり也

舟ありき下略

舟とむり江れ言とら出

千尋なくし海。磯よ舟あり

海色れを乃置気たり

計三句うらまふあんりりり

いふき波れらあいつりあきり

とまたたりいふあきりい海あり

い海色れを乃置気たり

いさいつり水ひきとら

舟ありしを清くし浦也

いさいつり水ひきとら

舟ありしを清くし浦也

いさいつり水ひきとら

舟ありしを清くし浦也

いさいつり水ひきとら

舟ありしを清くし浦也

いさいつり水ひきとら

舟ありしを清くし浦也

いさいつり水ひきとら

舟ありしを清くし浦也

いさいつり水ひきとら

舟ありしを清くし浦也

いさいつり水ひきとら

舟ありしを清くし浦也

角

維摩會講師のこゝに於て

一乃弄れ河也心似行り也

裂き起しよせりも身を今下也

あふれしこゝれ毎もいふなり

なごあつしりやあつりん

心のも雷れ得場乃あり日ふ

心れも雷し行乃秀句なり心

其日教をよとふ也

心のも雷心れも形もやこれ二句

いこゝあし侍

世甲れうらうらあふれおくれ

不紫よつりも雷やけあま

はふしうらうら君代のを

そふ出れれ侍乃秀場雷侍

雷も君の所得を知くころも

うらうら下れ心あふ

晴くうらうらや流るるれ海は

うらうらあまもあつり

そふ雷いふあふれれ山指

なごあつれおそふもあつり

あやうら雷とくれ侍人

句し心あつり也

け二句又さあし侍も

うらうらうらうらりて

山鳥れおりのお雷侍をひく

山鳥乃おられお尾とあつりあ

鏡をさ合よ引くも也おれの雄

お凡の長尾なり

景之... 山名乃... 雄乃
テヤ尾ノ鏡ありて見ゆ

母... 山名乃... 白雪

雪乃... 先ノ雪... 橋也
雪ノ母ノ橋なり

雪乃... 橋乃... 雪乃

友... 千鳥... 山陰

山陰... 友... 唯今

唯今... 友... 千鳥也

千鳥... 友... 千鳥也

福... 山名乃... 雪乃

山名乃... 雪乃... 橋也

橋也... 雪乃... 橋也

雪乃... 橋也... 雪乃

雪乃... 橋也... 雪乃

雪乃... 橋也... 雪乃

雪ノ鏡ヨリノ名也

千鳥

夕曉の景気なるく〜 祓けを
しるるよ雪の夕やうさるんせり
つらら雪ふ〜 けり衣の儀

のこらぬれを〜 けり

お新きら尾上の雪れ一松

山つて花れ後よな〜 けり

新あり尾上よ〜 けり

れ〜 あ〜 や〜 心なれおよけり

心を行ろ〜 是平たれ命也〜 けり

新きら〜 けり 心なれ〜 けり

けり也

ま〜 鬼よ〜 けり

鳥けり〜 けり 雪れ山

天上よ雪山〜 けり 鬼の

下也をれ〜 けり 鳥〜 けり

鳥と雪よ〜 けり 山〜 けり

山〜 けり 寒若遍身

寒若遍身 朋夜 巢造人 けり

男もかけ〜 女鳥 何故 造作 栖

安無常 身と 鳴と 感經よ けり

とや 結縁と けり けり

雪山童子 乃〜 けり

尾上れ 乃〜 けり

山海と 雪と 鹿の〜 けり

尾上れ 乃〜 けり 誰〜 けり

を〜 けり 誰〜 けり

尾上れ 乃〜 けり

女子と三車よむきとせて付行也
お向大事也ね凡れ巻中ん明名姫
君之業んて大舟れ宿より三車ん
紫上れ春子よいふりてこころひん
云れ日乃よりや行名跡いづれ上
叶心方うへ三れよとてい流氏おん
こやうなり日新や霜とるん
竹れ紫馬き山あひれ袖
山あひてとれり小忌衣也右布を
袍よして山藍とて竹れ紫を
すりて五節れ霜人より日新の
苔れもやう也日文字よりより
日新や霜とるんぬんて竹れ紫
馬とて云心也

山藍とてとれ袖乃より日
新いづれふ左系より霜拂縁ハ
竹れ紫馬きとて竹のを流とれり
山藍れ袖なり
月さゆらぬ洗川よ新冬と
氷よすゆら山あひれ袖
山あひよとる竹れ紫方とあり
こり新れ雪よとゆら山風
小糸のくく葵ととととありや
北のハ霜月中雨降時乃紫也
葵とるふ川結ひれ心とて付也
北のハ霜月中雨降時乃紫也
葵とるふ川四月中雨式子内親王
安院よありとるくくこの御拜

くろくふく山寺此乃
九宮ふ佛とあはれやう書て
寺これ僧達禁裏して佛名行て
ゆりふ也山乃大衆解ふ執行儀式
かり
長
佛名をくく寺これ僧達禁裏此
山名をくく降来らるるなりし
布施をくくあらしめや

愚問老葉年五

旅連歌

心よきりなをくく神とすか
くくはきこくくは福小福ゆり
あやとそん男とおりふくかこ
まくあしよこ中らも旅れ中じ
只今れくく色くく遠離と思出教也
世れあんと色くくおりあふき
まくそけくく色くくやうきり旅れ完
園れおくく乃山くくくく
お板やまくくいつくく人富くく山
まりくく諸れ中らも色くくや
と長山縁乃いつくく福人
うりたあなくくくくくくくくく

ひいつるは木の根も根もす
らんとうまうしをひひくす

中らやまの一日をこれかき
見る程にらる山海とあらりき

まひや あ〜いよらら整はら神

山 山をさかたに吹送ら風かり様や

下んとおひつり夕あきとて整は乃
月殿よりつりきて旅ひさすも

香方人此公なる〜

あら乃あ〜とそいふあま

とつすてまき〜山越て

まひや まつと整はれ末小整とく

つ〜あまをさ〜河古里

旅う〜紅雲の山を杜せん

あら〜さ〜い〜ぬわの山

横をよ遠方人やま〜人

月 古〜あ〜何と〜曙は山とら

ま〜旅よ出ら人〜けお布〜神

出んと公とつ〜く〜中ら整たり

別の横をれ縁よえあ〜せ〜也

あ〜ら〜い〜さ〜〜と〜た〜山

お〜ま〜ひ〜あ〜月〜旅ひは〜枕

前 ひり枕袖乃をま〜ふ〜や〜ら〜整は

月〜さ〜ひ〜ひ〜れ〜ぬ〜ら〜と〜す〜也

山〜弄〜れ〜月〜乃〜を〜ら〜也

長 此九句別よまらす〜ゆ〜と〜旅

此便かき紙深くをよこあくる
へきや引舟母の

原の石中しく泉をうめさ

古つし書取の流のいりり

日向と書取の流のいりり

古つめく原の流のいりり

中りし書取の公をよすし流ん

長注の

今あつたかたりてそゆ

おりに中書取の流のいりり

ほくくまていりりりりり

杖よりし山流の友と力めく

流の杖よりし力の友をよすし

ほく杖よりし力の友をよすし

杖よりし力の友をよすし

やうしりりりりりりり

言根しりりりりりりり

長 斧の言ととととととと

おりにやうしりりりりり

来つたりりりりりりり

旅人のりりりりりりり

日向の流よととととととと

くれりりりりりりりりり

具也用んれりりりりり

長 未とら乃事りりりりりり

用んれりりりりりりりり

何とらりりりりりりりり

雪の流乃りりりりりりり

白
別山をふりてとくを
あなれとつらきもつたふか
とらうと人を送るは也

長
月夕の山にれ駒の言りて
尺くつらとめや白の月とて

じよは新くしぬ山り

よりおてゆく新つらる上

東坡のや馬上續残夢 不知朝

日昇と仰り

長同詩引

やすじ水法の水は清く

山さし駒と林鹿乃おふ飼て

かたし山ふやうらう林

詠いと唐れ布し雨も便めく

やすしぬおんをいつら旅人

くら枕ひすい月れあはれよ

長
け三句又みく侍まてや句乃さ

一しありて心こりらうら

とらうれ旅うらに況とあり

とふ宿よ心くれ人とんく

うれ志つとたうなると旅宿乃

ありれ心ありと心あきとめてりや

いとれ侍ん

長
浮沈大うちを中とくと付れ

よりまてりや

つらら日いれそとくと雲は

白
尺の川うきくいつら旅人

雪中乃旅人れ振るやうら

長注同細

まよとやうぬと何よのひん
中よりち田養れ徳乃ぬれ言言の底長
向より田養れ徳とくゆくと
名よいりくきぬ田やうわらけら
長同

ほくらとくらも物そりのき

夏より此草屋れぬよ旅よりて
夏より此草屋のぬよ旅よりて
昔より今 但よりくらとやさん
草屋の草耳なまよくら草合ぬれ
草とくらと物そけつくらよ夏
何れぬれぬよくら旅物よくら
くら草屋ぬれくらよくら

いさりたれしーのむらぬのめて
あやのさよふさよをくらよ

きくらいあきと遠き古心

山より此草屋れぬよ旅よりて

旅宿乃秋れ言さふくら古心ぬら

くらよとれとぬれくらくらくら

たよくらくら海くら心也

草屋れぬら古心ぬらくらくらと知ぬ

くらら此草屋れ言くらくらくらくら

くらくらあすとくらくらくらくら

旅くらくら山落れぬふくらくらくら

自 付やうとくらくらくらくらくら

あまのあまくらくらくら

長 くらくらくら

あはれまゝの草花のいふ
いふ花の咲く時毎にさう山
いふさうさういふとき人すさう山
草花のいふさうさういふ
いふさうさういふ下歌

此山の女文出下れ歌宮へや

お母の鳥籠さうさうや
とふれぬ乃花のいふさう
さかるといふわけむいふ
晴くらのぬれいふ人出さう
さうさういふさういふ
り花のいふさういふ
こさうさういふ山乃声
さういふさういふ花のいふ

あはれまゝの草花のいふ
いふ花の咲く時毎にさう山
いふさうさういふとき人すさう山
草花のいふさうさういふ
いふさうさういふ下歌

お母の鳥籠さうさうや
とふれぬ乃花のいふさう
さかるといふわけむいふ
晴くらのぬれいふ人出さう
さうさういふさういふ
り花のいふさういふ
こさうさういふ山乃声
さういふさういふ花のいふ

あはれまゝの草花のいふ
いふ花の咲く時毎にさう山
いふさうさういふとき人すさう山
草花のいふさうさういふ
いふさうさういふ下歌

川のせがれをそそぐまゝに流るる
知人えらむ松と松をば

似たりとてし 詠をよみき

あらしをてて 中なるそよひり花

似たりといへばとておとくきふ山

流よわらむとてあらし白の作り侍也

あふはりしとてうらあきと詠乃

是等の一向なる抱されいほすまき

ゆくと侍す白の他乃吟味とれと

尸のま也

あふはりしとてうらあきと詠乃

あふはりしとてうらあきと詠乃

是の函谷園とてなるとて成只今

あふはりしとてうらあきと詠乃

鶯鳴乃古事記とてふ神らに

あふはりしとてうらあきと詠乃

あふはりしとてうらあきと詠乃

詠乃定まを詠をまゝとてうらあき

とてうらあきとて

あふはりしとてうらあきと詠乃

あふはりしとてうらあきと詠乃

あふはりしとてうらあきと詠乃

あふはりしとてうらあきと詠乃

あふはりしとてうらあきと詠乃

あふはりしとてうらあきと詠乃

詠乃懐れ素も也

あふはりしとてうらあきと詠乃

あふはりしとてうらあきと詠乃

あふはりしとてうらあきと詠乃

なまけりけり身又のまき
詠枕志つりきく大むきつり
家よ一軒れまいすきす
長 理大よ雪れ詠のし世周々
け二句せめさまるうへ梅大
なまけりけり身又のまき
家よ一軒れまいすきす
感懐のこりかたや

母 里のありしれ末乃山を
つ井よゆりなと詠り人と
おくりすてらよそらるせり

野寺近きまのひのし一軒れま
詠とせのひのしれ詠れあを起
しとせぬあそくしとせぬあそく
野寺近きまのひのし一軒れま
詠とせのひのしれ詠れあを起
しとせぬあそくしとせぬあそく
詠とせのひのしれ詠れあを起
しとせぬあそくしとせぬあそく
あそくす又誠とゆ

人けつてきく詠乃ゆ来
大竹や山詠や里よ成ぬん
山詠よ大竹や山詠や里よ成ぬん
詠ん詠ぬしとぬ山詠よ成ぬん
そとあそくぬれあそく人家の
他とせりぬあそく
長江同句

龍の首途といふをりく
長く乃宿龍をけい大龍て
かへりてかへりて

さきまれの後をうていりて

山流れ町をぬく乃夕家

神を月町ぬくを乃夕家

流と山流とをいへり

長川寺同

むらく袖の山をうりて

袖の山名をうりて

振とのいづれ也 長江寺あり

江よ公との寺あり

花より志賀の山をうり

月とあんなを心柱の山を

志賀の山越の寺此題よ

さきまの山をうりて

山流れ真なる

志賀の山越の寺此題よ

けいひと山と柱との志賀の山越

ねぬりてなるよ

山流れと山越の寺此題よ

けいひと山越の寺此題よ

紫と山越の寺此題よ

ねぬりてなるよ

山流れと山越の寺此題よ

けいひと山越の寺此題よ

ねぬりてなるよ

昔ハ大と云ても初末と知れ今ハ
我と云はれり今と云ふ也丹波
孫ハ一と云ふ事ハ書付了也

古事記ハ及
天原ノ事ハ小云ふ事ハ大ハ事
カク一と云ふ事ハ一也

海ノ事ハ一也
右ノ事ハ一也
いつと云ふ事ハ一也

梓弓ハ一也
和田ハ一也
いつと云ふ事ハ一也

二句ハ一也
一也

利早振ノ事ハ一也
一也

一情ノ事ハ一也
一也

一情ノ事ハ一也
一也

一情ノ事ハ一也
一也

一情ノ事ハ一也
一也

一也

くやすあそこの松風お吟ら
るるあや

夕風あつき川つたれ里

^自 若そくはよ小舟とまらん

やすくとあつ旬なまの河つた

猪伯せいの中つた

長位およお

山へさへびくおやさん

^自 古の草木といふ猪伯言

旅亭しら右とせいの中つた

いつはれをそくこの山

^自 古里のこれ千里とるあし

三千里外随行李十九年中

任轉蓬は公也三千里乃おれ

^自 心らそりなまのこれ巻よあり

古里をやり小公いつまあさす

三千里外乃あつたつた

決つたこれ乃公あつ

きしあつたなま

右つれ山おまの心をも

なまの心をも

右つよ身とあつた

^自 おしんやうをけよたれ

つすいあつたおと

^自 おしんやうをけよたれ

おしんやうをけよたれ

^自 かつらと月乃都よ

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

なくまゝ人と付侍也

おうじ此石のゆきま中道

うりても都や家の後なるん

身とて風神のまじり

初め申り候はるまじり

伊勢やあつれなまじり

さやまのれをまじり

いへまじり

まじり

家と都よまじり

長 旅枕とまじり

けさ向み候まじり

くまじり

おれまじり

おれまじり

後いまのまじり

山海より馴れ候まじり

吉乃れ松のまじり

いれまじり

まじり

山海に松と右里の風

ありまじり

まじり

おれまじり

おれまじり

この旅人をまじり

愚句老葉第六

戀連歌上

おのれをうらなふまこと

目 見ぬ人こそさか風よ守りて

世 甲 ちかちかこゝろをわたりぬれば

あふまぬ人こそ無きわたり

長 家 ありとくこゝろをさか風よ守りて

世 甲 以下略

さか風よ守りて

さか風よ守りて

なまこみ床うらなふまこと

自 あまふまことさか風よ守りて

あまふまことさか風よ守りて

いさよふまことさか風よ守りて

F

あり小舟うつらうの枕河也舟の
床よりおりのせり

長門舟は乃河前よあり

うしを公れ来しおわす

自 乃く人よおりのしりあき

君よしりおりのしりあき

くしを公れ来しおわす

うしを公れ来しおわす

長 周旋ありては候あ向し往侍也

自 乃く人よおりのしりあき

公の思前向うしを公れ

つらゆし 袖乃きしを公れ

自 公の思前向うしを公れ

乃く人よおりのしりあき

長注前よ同

長注前よ同

自 乃のしりあきしを公れ

歎きし二葉をのしりあき

歎きし二葉をのしりあき

長 乃のしりあきしを公れ

人よおりのしりあき

志き山の志は深きふたふた

かきしを公れ

自 志き山の志は深きふたふた

行舟ありて人を待たしを公れ

美原の舟は深きふたふた

人を待たしを公れ

人を待たしを公れ

とぬ福知んをらむはひき
さては世力よ何とくえん
天地もさるるらむわが世
誰ふらむは法とていふ
ありしやむじもかた無は
け二句の河のちるを

これの公もまよふ成り
いそがよわが世の人の
公けやよなるらむとていふ
羨也句のまよふはん

あつて公やうらひはん
ま本ふらむわが世の
あつてはあつてはあつて
いふらむはあつてはあつて

あつて道といふ人のあつて
今くはあつていふとていふ
あつてはあつてはあつて
けの句のあつてはあつて
あつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつて

後とおもふ事しめとふと記す人ある也

誰袖と云ふてもあやまらん

力れう記すふりての夕言

あ、誰袖と云ふてもあやまらん

夕言と云ふてもあやまらん

おりにしよと云ふてもあやまらん

は、あやまらん

うらやまのつれづれと云ふてもあやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

あやまらん

まじり来さるらしてこのまじり
夕あれいふとおひし〜といひ
公也又又おひしりおひしり
いふやといひおひしり〜といひ
夕言い〜らまされ〜

長 けりやとけりや下略

このまじりといふ世に記
結られ先れきす〜
月 けり〜月日はあ〜
けり〜とあり

まじりといふ〜
夕あれのお寺〜
月 けり〜月日はあ〜
けり〜とあり

けり〜とあり
けり〜とあり
けり〜とあり
けり〜とあり

けり〜とあり
けり〜とあり
けり〜とあり
けり〜とあり

けり〜とあり
けり〜とあり
けり〜とあり

白
くは中なるまになきしむいひの
はるく乃名也

はるの一日。おまへはあつら
夕られいさひとらすも堪えて
まらとんつらうとく人いそ
おひきまほしてとすいひせん
人れ名よかまらやにあら
いふれはいこもむなしくとく人
いふ向よりく乃公にまらつら
れ切あら公も也くく公を
見ゆらく一別公あふくすそ
ゆらと也

公わそく公なわくく人
横在り三はく人いまらよのわら

今まんとくえくと輕き
人と約命なまやいせん
向いすくけり也ゆひんたふ
とくらふ書行ゆる

ふやらうらうた高れ葉の文
神垣あまひいそく人にて
自
井ふ振神はいれとくぬく
人まや人乃見ま、初く
再れ意趣ととまらかやうの縁
すく人く高れ葉乃らうら
似らと恨ら公也神れいれあま
昔ハの平とそり合たり
引くやかり神れいれま
標ハあまを文つきよたり

け二句を侍るいし也

長ほまふあや

うらそつてはあまなるる

中らうれ榮うしあ宿直人

かうそつ宿直人れもやあま

うらそつてはあまなるる

けうらそつてはあまなるる

いつあまそつてはあまなるる

美馬のゆもあ中いあま

あまそつてはあまなるる

うらそつてはあまなるる

け美馬の思ふあまなるる

あまそつてはあまなるる

あまそつてはあまなるる

あまそつてはあまなるる

あまそつてはあまなるる

あまそつてはあまなるる

あまそつてはあまなるる

あまそつてはあまなるる

あまそつてはあまなるる

あまそつてはあまなるる

あまそつてはあまなるる

あまそつてはあまなるる

あまそつてはあまなるる

あまそつてはあまなるる

あまそつてはあまなるる

あまそつてはあまなるる

あまそつてはあまなるる

登りし物と秋風うゆを

公河これらあり 長は同

ら秋かあし月乃を

流れにありしより成又こしく

常れ園をありしと出らる秋は

れ切らるありしを同けと云ふを

人とありしを園をありしと云ふを

うは力にありしをれしと云ふを

こすき流れ月よれせり

人よふなる月をれしと云ふを

男よありしと云ふと云ふをれしと云ふを

うは月をれしと云ふを

れしと云ふをれしと云ふを

あつてのしつと云ふを

られこの世はあつてのしつと云ふを

流に江をれ水をれと云ふを

自 ころはこころりなりと云ふを

らつてせしむるをれと云ふを

江乃流にふなるてと云ふを

れはと云ふを

水島れ江乃流にふなるてと云ふを

れと云ふを

公よ公まのふにやあまの

神のふにやあまの

自 向波れよふの流よ世とつらと

わすれあふと云ふを

優れよなる

長は同

ほつちなまもつて同いあふ
紫のいこまふくあつ水は細く
目よまもつてせりつこたなり
いこまふくあつ水は細く
ゆ也 長江川舟なり

いこまふくあつ水は細く
いこまふくあつ水は細く
大上りつこたなりいこまふく
いこまふくあつ水は細く
長同

かまふくあつ水は細く
花馬川いこまふくあつ水は細く
又いこまふくあつ水は細く
て也いこまふくあつ水は細く

長江川舟舟同

ちいれ海乃舟なり

松山をこれやいこまふくあつ水は細く

いこまふくあつ水は細く
いこまふくあつ水は細く
いこまふくあつ水は細く
いこまふくあつ水は細く

いこまふくあつ水は細く
いこまふくあつ水は細く
いこまふくあつ水は細く
いこまふくあつ水は細く

いこまふくあつ水は細く
いこまふくあつ水は細く
いこまふくあつ水は細く
いこまふくあつ水は細く

いこまふくあつ水は細く
いこまふくあつ水は細く
いこまふくあつ水は細く
いこまふくあつ水は細く

いこまふくあつ水は細く
いこまふくあつ水は細く
いこまふくあつ水は細く
いこまふくあつ水は細く

これに世故と世を乃海に取らり
るに記するに千一はの世
俗者れ物と世に又とすすを
染るか下略

こらぬもの記と何と云ん

本玉と云やしら計れ世乃山

自 本玉をとりし物漸成とあり

なとありや本玉と云やしら計れ

世れ山乃決くからしるに世は

つよあ世と云と云ふに世れ山

叶才玉といふと云ふ人付中世

世と云てよらん一と云ふに世

世と云ふ山にありしと云ふ

世に依て下略 本玉をとりし物

海がしらとありしとあり

本神れ海乃と云ふに世中

人の思本れ山と云ふに世

自 向よ世つらむに世ありしと

心なり 世に世あり

世と云ふらひいと世と云

自 世に世と富士と云ふに世

自 本に世れ乃と云ふに世と云

自 清く世れとありしとあり

世と云ふらひいと世と云

自 世と云ふらひいと世と云

自 行世神と云ふに世と云ふに

自 本神れれと云ふに世と云ふに

自 向い世と云ふに世と云ふに

おひらな夜をくはひりや
おとまりん空居乃ちひ光

おは信公といふ東州居
おれいりせと名をり表さ

これ味屋といわれぬ今
いせもりて人の位と有り公也
男如れ有村とむじり

中いそられつゝに乃ち
自 十市葛城同遊 今おれんや

たまじつゝんやきり乃ち表
白雲 長江居乃ち川舟同

今やとまりくは信公の宅
おれ公をくは月夜く

くはれんか力あむおせ

月とせくゝとてまは
自 河は奇也くは月とせくゝとて
くはりまらて力あむおせ

之とておれ
有公乃ち句や

公とてますよとて

自 終れ方れ表とておれ
公とてますよとて等用とてぬや

終れ方乃ち身とて公とて沈む
長江の河おと同一に真とてぬ乃
くはにありよ終乃力きておれ
而表あさうすとて

おれらりゆ 出れおれ

年らわらぬ花はさふ花より

身や心月よまらぬと

自 花はさふ人いつきあき花よふ

秋も花よふさむいれいつきあき花よ

そこの心くちまよふとたなを花よふの心

なう花つとをまらぬ花よ

自 二あ人しきうん相と三日月

此二句題よ長し花よとつとつと

長 け三句又題よ長し花よとつとつと

ハかりいえさるんや公の也

長 かりいえさるんや公の也

魚らさしかりい出よ乃るの月

自 ありしかりいよふしをあれ

公の也 かりいよふしをあれ

自 公れいよふしをあれ

自 いふぬいさるんや中れ身よん

自 うつり也唐古と中れ夏よん

自 ありしかりい出よ乃るの月

自 てれいよふしをあれ

自 花のまよふ心くちまよふの心

自 花のまよふ心くちまよふの心

自 かりいよふしをあれ

自 長注あり

自 何と情と程とありん

自 自やあましつとつとつとつと

自 通しつとつとつとつとつと

自 通しつとつとつとつとつと

自 通しつとつとつとつとつと

延くける文とてあて君ももや
……とをりややや
かたきく

とすいぬ日なふらふん

一筆れ法とてあて今あれ
とりまとい一筆れ法也それと
合あてぬとあて心さす

いふと云也

榮り一それ人にて文のそれ
てりてけ二筆と合くやと也

一ちゆり法とあて

あつた文とあてよな

おれち乃法と筆れあふれ感
中り也連筆一筆よとさす

おれいふとつよまうりゆんや

点向あてしやとて二筆れ法
な一それとさすいゆり一とさ

行らいく

お向立ゆりれ法いつとさ成

てけけりたたりん一立りて法
鳥れ法と文よ成てたりよ

かすたりと也

愚句光葉廿七

恋連歌 下

くく一まられ歩し合わり

向 花よ恨本葉よ人よあらまひて

思言意い花のよ花い花よ人れと

しと待本葉よいお葉を山同中

情結りも終よつ目さく成果て

心いこしらふ勇とさすと歌を

花よお葉よもあやし恨や

まよおまをい人やさしん

家方とあわくこすい花片

花よ家の人とあらいつしこい

さ言と云と流ん高とまいし

おしりあれ心とくまを結り

花よあまし一れを結ん

長注公何異多かー 是度れ候

戸よあを連てあまら君とあまら

恋といぬといわのいあー色

あ一人い中舟月とあまらあて

心いみけつらまもあや

心結とこすいまら〜あま

源い〜あまら〜あまら〜あまら

あ向大るんてか付ゆるあまら

あこぬすもあまらあまら

い〜い〜あまらあまらあまら

ああ〜あまらあまらあまら

と人い名よまわん〜あまらあまら

かりつらあ〜あまらあまら

あまの御魂と契りあはせし御魂は
名よして御魂と契り成行の心儀
〜御魂の御魂

ありしときより御魂の御魂
有のよき御魂の御魂

御魂の御魂の御魂の御魂
御魂の御魂の御魂の御魂

御魂の御魂

御魂の御魂の御魂

御魂の御魂の御魂の御魂

御魂の御魂の御魂の御魂

御魂の御魂の御魂の御魂

御魂の御魂の御魂の御魂

御魂の御魂の御魂の御魂

御魂の御魂の御魂の御魂

御魂の御魂の御魂の御魂

御魂の御魂の御魂の御魂

御魂の御魂の御魂の御魂

御魂の御魂の御魂の御魂

御魂の御魂の御魂の御魂

御魂の御魂の御魂の御魂

御魂の御魂の御魂の御魂

御魂の御魂の御魂の御魂

御魂の御魂の御魂の御魂

御魂の御魂の御魂の御魂

わぬ名といひてわぬ名をいふ
名をいふてあはれいふて名をいふ
とあはれいふてあはれいふて

人といふてあはれいふて
あはれいふてあはれいふて

あはれいふてあはれいふて
あはれいふてあはれいふて

あはれいふてあはれいふて
あはれいふてあはれいふて

あはれいふてあはれいふて
あはれいふてあはれいふて

あはれいふてあはれいふて
あはれいふてあはれいふて

あはれいふてあはれいふて
あはれいふてあはれいふて

あはれいふてあはれいふて
あはれいふてあはれいふて

あはれいふてあはれいふて
あはれいふてあはれいふて

あはれいふてあはれいふて
あはれいふてあはれいふて

あはれいふてあはれいふて
あはれいふてあはれいふて

あはれいふてあはれいふて
あはれいふてあはれいふて

あはれいふてあはれいふて
あはれいふてあはれいふて

長注同

長江 ながえ さらけ 岸よ おくふらるけ

舟 ふね さらけ さらけ さらけ さらけ

舟 ふね さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

舟 ふね さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

舟 ふね さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

舟 ふね さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

舟 ふね さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

舟 ふね さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

舟 ふね さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

さらけ さらけ さらけ さらけ

下

今来んと世に情もあつらん
向
思へばつらきもあや
長
四句思へばつらきもあや

いふはこゝろのあはれ
向
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに

あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに

あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに

あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに

あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに

あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに
あはれ人れはあはれに

月とららよ、あはれに

月 とう池の姫よつとあまのこゝろ
妹の皆神とあまのこゝろ池の
洞とあまのこゝろあまのこゝろ
此用也

妹のこゝろ池のあまのこゝろ
それとあまのこゝろあまのこゝろ
あまのこゝろあまのこゝろ

水と神あまのこゝろあまのこゝろ

月 池のあまのこゝろあまのこゝろ
あまのこゝろあまのこゝろ
あまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろ
あまのこゝろあまのこゝろ
あまのこゝろあまのこゝろ

月 池のあまのこゝろあまのこゝろ
あまのこゝろあまのこゝろ
あまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろ
あまのこゝろあまのこゝろ
あまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろ
あまのこゝろあまのこゝろ
あまのこゝろあまのこゝろ

さうんれ信乃公也

今日このあし言まうし

人そうに身れあふといおりあふ

不定れ身をとつとあふ地乃中うた

のめし人そう也

三句入公思し作り身れあふといあふ

かふ人そうにたはまおあふといあふ

かふといあふ

何さうといあふおれまらあふ

あふといあふいあふといあふ

あふといあふあふといあふ

いあふといあふあふといあふ

りあふ也

あふといあふあふといあふ

あふといあふあふといあふ

あふといあふあふといあふ

あふといあふあふといあふ

あふといあふあふといあふ

あふといあふあふといあふ

あふといあふあふといあふ

あふといあふあふといあふ

あふといあふあふといあふ

あふといあふあふといあふ

あふといあふあふといあふ

あふといあふあふといあふ

あふといあふあふといあふ

あふといあふあふといあふ

あふといあふあふといあふ

ほ乃せけく契とて中

かまじをなと具れまふかゝるん

^月い平れ心河とあり

いくわらうあ身とを備わ

まけしよかから契りたや結く

その玉章そり糸と結ぬ

契りいそ花鳥乃流よ似て

^府二句心也花鳥乃流よ似くい流き

^長くそ也鳥乃流玉章は流也

け三句心也花鳥の流よ下月注よらす

本の柴ありしを契りかひら

あれる乃えまそとありさ流の

^角櫛々々くついでしそとありそふ木柴

ありしそとありそとあり

一月とてそやひといか

あひくくならやほ本れ花めん

^角妙莊嚴王品一眼の電乃ほ本れ

あふよあつらうとて佛はあひさ

くたひからけ句いまうくらなれ

むらひれやと乃果とふえん

しあふもふもふもふもふも

^角いほはあひくんとやあひいひ

しうあひくんとやあひいひ

け吾乃記とてくそりくそり

くそりくそりくそりくそり

あひくもあひくもあひくも

くそりくそりくそりくそり

人といひくそりくそりくそり

さしあけの身は世といふ
うに中や又せしむくまことか
人せしむるも十九有な色い
れ畏よりせしむくまことか
行ふ公也
四句を信するも只信を
おひいづくも信す也

三條の世は世といふ
又の世は世といふ
源氏物語は世といふ
世は世といふ

世は世といふ
世は世といふ
世は世といふ
世は世といふ

世は世といふ
世は世といふ
世は世といふ
世は世といふ

世は世といふ
世は世といふ
世は世といふ
世は世といふ

世は世といふ
世は世といふ
世は世といふ
世は世といふ

紫のなごころやおひん

自 心よこころあふこころあり

自 けふ有公も思ひく句に伝立給き

うねあひよき月やおらん

自 なあよほよほ一軒棟のえ

自 どうくして忘れ給ひ月をれは文相

へくありまふ詠しよと云公也

おひよあまら夕言れ棟

自 恨よこころあふ月よらんこころ

自 う心よつこころ足相しよらん

おひん

おひんよらんおひんよらん

自 足よこころあふ句に伝立給き

自 けふ有公も思ひく句に伝立給き

へくありまふ詠しよと云公也

おひんよらんおひんよらん

自 このまよひかゝる恨もあふ世ふ

自 大なる中へ恨もなき地也保く人と相

自 心よこころあふ句に伝立給き

自 かなとあふこころあふ

自 けふ有公も思ひく句に伝立給き

おひんよらんおひんよらん

自 命よりうらみあふ句に伝立給き

自 死後まで乃相を難く公也

おひんよらんおひんよらん

自 命よりうらみあふ句に伝立給き

心とつてはさういふことをさういふ
中に行末とありあつて

誰とあられおひし物ん

うつくしきなりてゆらたやせよ

うつくしきなりてゆらたやせよ

うつくしきなりてゆらたやせよ

あよああー

あつせとせちくそよんか

あつせとせちくそよんか

あつせとせちくそよんか

あつせとせちくそよんか

あつせとせちくそよんか

此二句とせちくそよんか

あつせとせちくそよんか

あつせとせちくそよんか

あつせとせちくそよんか

あつせとせちくそよんか

あつせとせちくそよんか

あつせとせちくそよんか

あつせとせちくそよんか

あつせとせちくそよんか

あつせとせちくそよんか

あつせとせちくそよんか

あつせとせちくそよんか

あつせとせちくそよんか

あつせとせちくそよんか

長
二句しりしは桃公せうしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

あらしのふれくもすましくしりし

う記申のまよな記世はれし、
う記申のまよな記世はれし、
いひのいんまきしる也

命のしよ 純乃とて路

君のまよな記世はれし、
藤文

友のまよな記世はれし、
友のまよな記世はれし、

よりのまよな記世はれし、
よりのまよな記世はれし、

まよな記世はれし、
まよな記世はれし、

いひのいんまきしる也
いひのいんまきしる也

よりのまよな記世はれし、
よりのまよな記世はれし、

まよな記世はれし、
まよな記世はれし、

いひのいんまきしる也
いひのいんまきしる也

よりのまよな記世はれし、
よりのまよな記世はれし、

くれのいんまきしる也

まよな記世はれし、
まよな記世はれし、

比翼連理のまよな記世はれし、
比翼連理のまよな記世はれし、

れ下まよな記世はれし、
れ下まよな記世はれし、

いひのいんまきしる也
いひのいんまきしる也

まよな記世はれし、
まよな記世はれし、

比翼連理のまよな記世はれし、
比翼連理のまよな記世はれし、

島部まよな記世はれし、
島部まよな記世はれし、

まよな記世はれし、
まよな記世はれし、

愚句光葉牙八

雜連歌上

雜と云部四季と專に入
 毎、諸人此不審有之勅撰者
 の准據也と云ハ雜といハ文字
 小應しく、季無等と混念也
 うらひとささきを此里
 おうまらしやうつらまよたりて
 鶯既鳴かといりよまき乃ね鳥や
 昔法門なり
 長注同

世のうらひとささきを此里
 神とささき
 神とささき
 神とささき
 神とささき

心とてししてはふいふと
先づいふく公なるくや

云々 そい ねんれん

子曰く あ 人なきこと

子曰く あ 徳ありては

徳ありては あ

子曰く あ 徳ありては

いふ あ 公なる

子曰く あ 徳ありては

子曰く あ 徳ありては

子曰く あ

子曰く あ

子曰く あ

樹を打て

子曰く あ

子曰く あ

子曰く あ

子曰く あ

長年 あ

子曰く あ

子曰く あ

子曰く あ

子曰く あ

子曰く あ

子曰く あ

子曰く あ

子曰く あ

下三十五
と風物花乃一きりあやうにされ
との時さうら人の榮と云ふもろく

なめくつてさうさといふすや

花をきこふれすといふ草花店

草花店乃人さすふきをたれはゆい

うさしてとたつてさういふさほ

誦らうせうと花を對してさう

さうたれ草花店よりきこはれたる誦

らうやうさうさうさうさうさう對

く草花乃述懐をり

人めさうさうさうさう此山法

花と風と、物とやあはすん

おしひんあき花と風と物とやあはすん
あはすんあ甲あはすんや

長注同あささき向乃板心や

こおさくおさうさうたれ夕會

とあやあさ記念乃あはすん

花とあさこちさうりてさうあはすん

のさうれさうさうんや

私さうああささうさうさうさう

さうさうさうさうあまれ物あ

おさうら法よあ江乃浦さうい

花さうさういあさうさう

里いあさしてさうあ本ああはすん

海さう風乃末乃さうい

夏れ日乃夕山さうさうあさう

いつさああさうさうさうさうあ

こさうさうさうさうさう

よみと大さつる月れ言ふ

夏虫とくハ世比言と鳴く

友虫れ方をこくと大と捨て言と留や

長注同 友れれ方をいたつ下略

かゝるく高乃月そかく

くすくす来む山よき門く

あふらる月そくくハ世比言と

体れ時ハ業りりよ艶あり

長注同

くすくす也 年とれわら

あやのむくくくふ菊とつて

あやめつる時節と今れわらふ

又菊と摘よらる漸く此色り也

長 陰午九日れくくくく

せられ未ハいせれきか

身と体乃落葉とこれのま

脈れ別なりハ落胤脈といふ源

物流ハあそんやと落葉とふらえ

中と流るそとらけい文と落葉と也

紅 物流乃初ハ近江君と嘆くこの源

あれ河や床夏たやあそ乃

まのりりらうの奇しき

ノヤ若葉の寒くぬ注りよお遠り

古くは注人ニ中くけ敷なり

更 後ハ別なりと落胤後と中ん世俗

いれらるや源女物流ハ物居やとあ

葉とふららんや女ニふらる也

それらい文とあくれま也

くやきりくす神あひて
あはれ言おれわふ船は枯て
こゆ外ふ何すうゆん

長注ナ

木葉とこれいつさるにほし
神あす老学れ妻乃夕時
付本林れくう休お力な母あ
たふ

長注同

神あれあふ力とあはれ
いつとさし足山ようん小松
おれわとあは言ひさう一
ころさるまふ

長注同

神あれさしれくさるに
折山おれ落葉とくはす
捨すふ費くう人れさしあせ
わく小れさるにわあ
風さるさるさるさるさる
むらとさるさる

双紙とくくくとの真の書
あつさるさるさるさる

あつさるさるさるさる
冬れ連弄いくわとと先師
さるさるさるさるさる

あつさるさるさるさる
あつさるさるさるさる

坊坊乃鳥と万葉と千鳥と心
又百津鳥と心何れと心と心也
御指されい千乃れ鳥乃心と心也
新りよ千鳥も心と心と心と心
あわきさうりく心鳥と心

心何れつ心と心と心と心と心
心と心と心と心と心と心と心

心何れつ心と心と心と心と心
心と心と心と心と心と心と心

心何れつ心と心と心と心と心
心と心と心と心と心と心と心

心何れつ心と心と心と心と心
心と心と心と心と心と心と心

心何れつ心と心と心と心と心
心と心と心と心と心と心と心

心何れつ心と心と心と心と心
心と心と心と心と心と心と心

心何れつ心と心と心と心と心
心と心と心と心と心と心と心

心何れつ心と心と心と心と心
心と心と心と心と心と心と心

心何れつ心と心と心と心と心
心と心と心と心と心と心と心

心何れつ心と心と心と心と心
心と心と心と心と心と心と心

心何れつ心と心と心と心と心
心と心と心と心と心と心と心

角 游れ上りて中れ一ひり
山にそやれる也 句に之れを

山下ありき 句にすさき

角 游りのよきやれ 徳と記しりて

大覚寺乃古游殿と公任曰流

れきいとして久しきとあり

大覚寺れ巨き流殿と見く公任

曰乃事 公任れ言ひしてひきく

なりあきとあきとなれておぼさ

てくれ

赤津赤つ 其言よりなりよ

くれと記つせれくやこそ人のみら

へりけら ともくれ流にひきり

流なり

中より月の新しきあき

角 あり山乃名れとてお水流て

のきとて山雲谷乃下米よりあり

とてて流れさしとておりあり

中より月と名れとておりあり

見ゆるさしなり

朽木れ中よすあり山陰

角 水清きと古舟れ舟きと若むて

是と一神と舟ひきく句に作流也

句ありと流さしとて家く

角 意のてくありかきとて田わたり

長 けく流るるなり

長 け三句より流るるなり

一とてと書れ名れとてぬと

山より此垣にむつる流きて
鳥の聲は縁有てそよよ流むつる
色は名もなきなりと云也

世帯の絶るも名なきなり
あ草のうらむる音なりと云

絶るも名なきなりと云也
はらへゆるんやと云流も有也
也注同

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

あつたなりと云山流なり

くさくさ草のるる白草のささげ

山のいづれもふ種ひくさる

居あつても灯のさすり物や

不夜城のゆかり〜種灯をさす

ゆかりゆかり〜

あつたゆかりのさすり物

たつきつむ夕れぬ乃草は店

か〜つ〜誰かすまう〜とある店

れぬよなと〜ひけ〜の心也

茶の店のぬれさ〜む町も〜也

とりせ〜る〜し〜句れけ〜む〜と

草店れぬぞ〜る〜店〜つら〜

若れ〜ら〜と〜水〜と〜ら〜

あつたゆかりのさすり物

のさすり物〜さすり物〜

くさくさ草のるる白草のささげ

山のいづれもふ種ひくさる

居あつても灯のさすり物や

不夜城のゆかり〜種灯をさす

ゆかりゆかり〜

あつたゆかりのさすり物

たつきつむ夕れぬ乃草は店

か〜つ〜誰かすまう〜とある店

れぬよなと〜ひけ〜の心也

茶の店のぬれさ〜む町も〜也

とりせ〜る〜し〜句れけ〜む〜と

草店れぬぞ〜る〜店〜つら〜

さしつゝふも海に里友の心
山居乃心あけし疾風の音もついで
うん

山居と信交通て中し物さく
ねもくもれし心もついで

居じよまの昔もあはれて
庭あそぶる冬れ木の花

新ら此山は業刈人もく
け二句又もついでや 長同

山物れより神は風吹く
そく業もついで言れ下

花車よついでやそく業もついで乃
風也

そく業もついで花は紙もあかり
こらメられと麻やからん

業れ乃まの身をまわすれ
まこと家物おちすそく業もついで

そく業もついで業れ戸をりあそ
い業れもまもついで

芦原よあまれ物やそく業もついで
昔れまのついでそく業もついで

そく業もついで替り言れそく業もついで
此二句又もついで

そく業もついでそく業もついで
替りそく業もついで

推まれ笛と漁笛も取成らそく業もついで
海邊乃山物れ系もついで漁笛村笛

そく業もついでそく業もついで
そく業もついで

何れも廣松へんまに生後よ

あつしきうあつあつらき徳

あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

長
付四句又別乃公あつしき

あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

向
あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

田山よーりり

あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

向
あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

長
あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしき

里をこふたれた月まで

まろくろの野乃村の四角

角 存遠きいづつをりお月落て

角 け四角入らるるや 長同

らほのませり 世に 雨也

角 竹もこの陰と神もやれしん

角 福もりと村もとけりや

角 福もりと射もとるやありけ世何

そつとけりあり

角 出た月を射るに

角 星と撞くお月れとれと付也

角 榮りれ末よりとかりけり

棒よりとるもとかりけり

角 射るしとれ世にありけり

角 長同同らありけり

夕まると山ありしと

平もれゆるとお月れ

くお月れしとけりあり

角 花れらとありけりあり

角 二句ありありあり

角 二句ありありあり

角 山陰の月や兔のゆり

角 殊乃入日ふくとあり

角 兔と月と縁あり鳥と日と同一

角 されは月日とありけりあり

角 中小有三脚鳥月乃中玉兔搗薬

角 兔と鳥はありけりあり

五七五 一ふなぬ物山

あふさし〜新れら乃夕明也

いりてる山よ法書いかな地也

右山鳥のこまてりあふ〜

五七五 一ふなぬ物山

あふさし〜新れら乃夕明也

いりてる山よ法書いかな地也

右山鳥のこまてりあふ〜

五七五 一ふなぬ物山

あふさし〜新れら乃夕明也

いりてる山よ法書いかな地也

右山鳥のこまてりあふ〜

五七五 一ふなぬ物山

あふさし〜新れら乃夕明也

いりてる山よ法書いかな地也

右山鳥のこまてりあふ〜

あふさし〜新れら乃夕明也

いりてる山よ法書いかな地也

右山鳥のこまてりあふ〜

あふさし〜新れら乃夕明也

いりてる山よ法書いかな地也

右山鳥のこまてりあふ〜

あふさし〜新れら乃夕明也

いりてる山よ法書いかな地也

右山鳥のこまてりあふ〜

あふさし〜新れら乃夕明也

いりてる山よ法書いかな地也

よのびささといふとせわれ

カ ともてよまなご都れあひの店

新都遷乃也東の店八軒とい

つくとおのりふとせりまふく

長 旧都乃人ふらりくふなりてせり

原と強ひくは行らぬや新じやわ

人こそあらひとせれと強心をあ

とがふしはさうく人うさうらから

月 ありや石さ都れ月の本

長 恨平乃公ありうてとせり

千万の人よまふくし左徳をせり

月よりいしおら行なり

きんい吹うとと藤がしよ海

をうら車れあふ月さうく

車れうらよ次笛れあふんよ送金

車れ管れ内也申んて次笛も七

這迄よりとや都るんらして

り あつつき月よ車やらとせ

心いふはららるなり

大 泣れ泣かろく

しれつおりの家とあふん

自 福えんよをさく小車れ者

大 宅と出らふ車れ力也福えん

せの宅乃いれ身とせ強くは神

車れ者とあつて三車よふ合て誰人

れ大宅と出らるととと端的也

割れ牛乃車乃なりとせいしれ家と

いんて出まろく 三車大宅より七

福多よ車は言さすてくれは宅
と出らんしうもいへりや

とくもさく終らふり果は
あつとひとふ小車は言

一さゆよもら世中は女
今福は言れり金に取らぬ

此市世中は女とてはゆめ
よらひ乃乃う来りなり

に山は市乃り金の夕万言
美れ乃可抱れ言買ふに成也物

よの盤夕よの終さなるとらぬ也
支声お夕れぬさすてはゆめ

可れ乃可抱れ乃言買ふとらぬ
罪いふふとれはゆめ

さかひくさく酒は言れ
酒はありさくさく者たぬ言生

の折といひ終さけ言さくはゆめ
沽酒乃家を教らるる人お言生

とらんさあや終さけ言さく
付とまらさくはゆめ

のあら人あらうとぬれ
いさふ言盤をさくはゆめ

よれ格乃まぬうと給
此言いふ格とぬれは長同

一志さう竹吹らるるは
梅さくさくは笛は言生

笛は言梅乃曲とぬれは長同
長同

あそびや来れしはるる色

^月 灯は来れし宿竹あそびく

お向の巻糸也付和の宿竹あそび

左邊也 ちよと字よりたのむ所樂

^共 小舟して灯と取合也

前句極意付向の糸折れ半也

知くさうしてさうりちよ

結さくさくやさくや老のしる琴

^后 子朝白牙の古うや 長周

月いさおれうにやれを

^日 四れ信よ確れしはぬまどさく

琵琶小隠月とさる之村白ひもれ

洞也打しも改まらぬ

^共 琵琶折ふんさるる千し又後と

かられ月よまのさるる

心れさるる心しよれ

うらぬいさよおらぬ文とて

^日 不取手短巻とまき有之胸中!

あそびやうにわらうと心也

^共 心よまき人あそび

あそびやうにわらうと心也

灯やうにわらうと心也

うけくしよれ

あそびの文字よ 紫とまき

^共 五句知るるあそび

い中いさるる君れ代と始と

^前 まるるあそびやまき

あそびやうにわらうと心也

賢聖の障よれをくへ賢を離
る末世也いんや相れ也
賢聖の障よれをくへ賢を離る
未れ世よかりしうや

身れうしあふしあひらう
お向い無けりあひらうや

佛は淨と色と一とあき

人いふしとるはあふし人
お向いしとるはあふし
と便ししとるはあふし

お向いしとるはあふし
公よぬしとるはあふし

人いふしとるはあふし
此句は公の世より記也 淨土無量
壽經下卷 貪窮下 勞困之
常无凶田亦憂欲有田无宅亦
憂欲有宅無牛馬六畜奴婢
錢財衣食什物亦憂欲有之
適有一後少一有是思有齊等
適欲具有使復麻未散如是
憂若當復求索不能時得思
想无益身心俱勞坐起不安憂
念想相隨勤苦 如此之
句々々
長同
句々々

愚句光葉才九

雜連歌下

そよ風のうめ夕立は流

自 陰より流るる夕立を流

十市より夕立すししれ舞より

と見ゆし

十市より下略 夕立らこて流る

山月より流るる

こと流るる夕立を流

自 松浦より流るる夕立を流

大略田舎と縣より流るる夕立を流

縣より流るる夕立を流

松浦より流るる夕立を流

と見ゆし

あしをいしし言ゆり松

言ゆり江の松とお生れやうゆり

とよつとく句の付ゆきこれいし

うそあしをいし言ゆり松

あしをいし言ゆり松

あしをいし言ゆり松

朽れり松より流るる夕立を流

後撰よ文院危なり流るる夕立を流

池の中流の松と流るる夕立を流

松より流るる夕立を流

住より朽れり松より流るる夕立を流

長注川舟同

佛少をなす夕立を流

あられ朽れり松より流るる夕立を流

和列長谷寺觀音のまゝ、江列
之の松山の木ありく道にあらむと
おのひいそくくそ

長谷寺の観音におの松木ありく
とらりし也

これお松とらりしをてん
青きけいお松とらりし松林の夕霞
おのそまじりし松のまじりし松とらりし
つりりしとらりし松のまじりし松とらりし

神れらりし乃深きまじりし

これお松とらりし乃深きまじりし
此松舎山乃八幡の記宣よ
神れらりし乃深きまじりし
お神乃草とらりし乃深きまじりし

まじりし乃深きまじりし乃深きまじりし
まじりし乃深きまじりし乃深きまじりし
おのひいそくくそ

長谷寺の観音におの松木ありく
とらりし也

これお松とらりしをてん
青きけいお松とらりし松林の夕霞
おのそまじりし松のまじりし松とらりし
つりりしとらりし松のまじりし松とらりし

神れらりし乃深きまじりし
お神乃草とらりし乃深きまじりし
おのひいそくくそ

長谷寺の観音におの松木ありく
とらりし也

こゝろや、舟を放し流るる
流るひれあくと遠よ日に流て
舟れここ中舟おそくわんれ山
のまゝく漕舟こまりきりすす長岡
こゝろと老れ流るるら
言破れまらこまわくをく高
こゝろこゝろこゝろ格をちりや
津れらお乃をくくろとうにせん
二句又及し流るるら、長岡
方うとおわす町をさりし
とやえとおわらうふ朽やせん
舟有流れらまを流ると此舟の病
朽らよとく流る也 長岡
こゝろく恨くはやくらん

まておろせお有るやれ我ん
公とやふはくはあしと
いくはわ〜と世と信じて
いくはわ〜と世と信じて
わまれのりふやう〜とく
公とやせハ方と長岡
ん〜とやう〜とわらうと
うはわらう〜とわらうと
舟おれを乃らり乃世の中
けのらおるをふんれをいさなれや
またり 長岡
あ〜の中く〜とわらうと
うのれはとぬまはせよ

此句うをうふとせ未れせふの
中くうんげん

法蓮乃之分別のつて

世中いりあそふそふそふて

一日乃身れ力とふの

世中いさねしじあめ日

一句れ仕立た公作んや

一句乃作れましく

世中いさねしじあめ日

いれまそふの

あれ味あ乃まれあ

あれ味あ乃まれあ

あれ味あ乃まれあ

あれ味あ乃まれあ

あれ味あ乃まれあ

あれ味あ乃まれあ

あれ味あ乃まれあ

あれ味あ乃まれあ

あれ味あ乃まれあ

あれ味あ乃まれあ

あれ味あ乃まれあ

あれ味あ乃まれあ

あれ味あ乃まれあ

あれ味あ乃まれあ

あれ味あ乃まれあ

あれ味あ乃まれあ

如夢幻泡影わらわの清い世を
これ愛と毎れ逢よまするん
くらよせまる塵の世中
誰人の樹下右上げ蓬よ浮世有
こころしきしあひまへえ拂えと
云ふ也

うらやますよたのいふ海よりのほ
あきらむらうらとあせ中
け二句とてわらわらるる
あきらむらうらとあせ中

あきらむらうらとあせ中
あきらむらうらとあせ中
あきらむらうらとあせ中
あきらむらうらとあせ中

あきらむらうらとあせ中
あきらむらうらとあせ中
あきらむらうらとあせ中
あきらむらうらとあせ中

あきらむらうらとあせ中
あきらむらうらとあせ中
あきらむらうらとあせ中
あきらむらうらとあせ中

あきらむらうらとあせ中
あきらむらうらとあせ中
あきらむらうらとあせ中
あきらむらうらとあせ中

五道六道の輪廻と縁ゆかりのあり
け二句ふたごころのありや

くちなり力ちからのいふ縁ゆかりやならん
久ひさの世よの御針みはりの糸いとの世よ
御針みはりの糸いとの世よの御針みはりの糸いと

右みぎの普ふくくくわてくくわてくくわて
御針みはりの糸いとの世よの御針みはりの糸いと

何なにの糸いとの世よの御針みはりの糸いと
くくわてくくわてくくわてくくわて

世よ甲かの糸いとの世よの御針みはりの糸いと
あり糸いとの世よの御針みはりの糸いと

あつたつたの糸いとの世よの御針みはりの糸いと
難がたの糸いとの世よの御針みはりの糸いと
糸いとの世よの御針みはりの糸いと
糸いとの世よの御針みはりの糸いと

縁ゆかりの糸いとの世よの御針みはりの糸いと
世よ甲かの糸いとの世よの御針みはりの糸いと

中なかつの糸いとの世よの御針みはりの糸いと
糸いとの世よの御針みはりの糸いと

糸いとの世よの御針みはりの糸いと
糸いとの世よの御針みはりの糸いと

さてもさし定むら捨方介も
ふいに住人おは行らぬまの
便人おはさすおは公也

捨方山居の神とてさるるや

もきこものなれや

公とせれはるふこころん

お向の有ま〜さ向あり也

お向のま〜さ向あり也

世のうらむ〜さ向あり也

お向のま〜さ向あり也

〜さ向あり也

〜さ向あり也

捨方公のま〜さ向あり也

〜さ向あり也

〜さ向あり也

〜さ向あり也

〜さ向あり也

〜さ向あり也

〜さ向あり也

〜さ向あり也

〜さ向あり也

〜さ向あり也

〜さ向あり也

〜さ向あり也

〜さ向あり也

〜さ向あり也

〜さ向あり也

〜さ向あり也

後、もすの公也

墨、まゝして旧、くまんとす

も、神のありしや

く、たや民の上よ

神、りや、く、く、方、を、か、か、

一、天、の、民、と、憐、れ、し、徳、を、

く、ん、と、思、は、れ、ん、か、と、云、ふ、也

仁、乃、も、か、く、一、に、は、か、あ、し、

し、く、や

か、く、く、く、く、く、く、く、

日、あ、る、方、は、人、の、熱、と、す、す、

人、の、熱、と、す、す、と、か、方、に、は、あ、る、

公、也、と、仁、乃、も、か、く、く、く、く、

長ノ注用

く、く、く、く、く、く、く、

く、く、く、く、く、く、く、

日、世、乃、も、皆、老、ん、と、す、す、

山、は、住、方、の、い、つ、と、す、

か、く、く、く、く、く、く、く、

日、二、向、又、く、く、く、く、

く、く、く、く、く、く、く、

日、の、く、く、く、く、く、く、

日、世、の、く、く、く、く、く、く、

長注ありす

公、か、く、く、く、く、く、

ま、く、く、く、く、く、く、

く、く、く、く、く、く、

今、ん、れ、老、乃、未、て、

おろしうへぬあまの心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

あふきあふくお老の心

おりのあつたははこわき
おろのいふおとしり〜親のふ
おろのいふおとしり〜親のふ
おろのいふおとしり〜親のふ
おろのいふおとしり〜親のふ
おろのいふおとしり〜親のふ

おろのいふおとしり〜親のふ
おろのいふおとしり〜親のふ
おろのいふおとしり〜親のふ
おろのいふおとしり〜親のふ
おろのいふおとしり〜親のふ
おろのいふおとしり〜親のふ
おろのいふおとしり〜親のふ
おろのいふおとしり〜親のふ
おろのいふおとしり〜親のふ
おろのいふおとしり〜親のふ

此親子三句其公分のや

此親子三句其公分のや

此親子三句其公分のや

此親子三句其公分のや

此親子三句其公分のや

此親子三句其公分のや

此親子三句其公分のや

此親子三句其公分のや

此親子三句其公分のや

此親子三句其公分のや

此親子三句其公分のや

此親子三句其公分のや

此親子三句其公分のや

此親子三句其公分のや

枕しつひとせりまゝとふと長乃
周しつひとせりまゝとふと長乃

力つづつとせりまゝとふと長乃
花よりつづつとせりまゝとふと長乃

とせりまゝとふと長乃

自 日と小勤と取方れ終乃限と結ん

経文一如新乃大減此公方なり

如新乃大減乃公勤とせりまゝと

長乃日と結ん終乃とせりまゝと

結乃とせりまゝと

とせりまゝとふと長乃

自 大乃月日とせりまゝとふと長乃

結乃とせりまゝと

とせりまゝとふと長乃

自 月日とせりまゝとふと長乃

結乃とせりまゝと

自 乃き人れ終乃とせりまゝと

草一色と二人れ子父の廟一とせり

とせりまゝとふと長乃

とせりまゝとふと長乃

とせりまゝとふと長乃

自 一草と二人れ子父の廟小とせり

とせりまゝとふと長乃

とせりまゝとふと長乃

とせりまゝとふと長乃

とせりまゝとふと長乃

とせりまゝとふと長乃

蓮臺野も過ふりさりとて二
度迷ひくらしくも愛力をとりて
和よのこもよらあら人あはれいさ
鳥戸の松乃まよふまよふ海邊
かきせりあふ

あふとさう人かふかこ

先達ハうらぬ世あはれん
じくくかるとたふさる

あふ治よ七のくねらり
四十九日たしつるあや 長同

あふ行もかふらん

山寺より山治より日乃日敷

あふと治より山寺山里をよ
こころをて念誦をよらる

長注同よ行をかく日敷のあや

あつまれ物とあふあや

東也や松れまらあはれゆり

月よまよふ 東也大和也

かきせれあふり人あはれ

あふら川つらぬ水とさくはし

古今哀傷并あり

あふあふこあふあふあふ

あふまきりあふあふあふ

あふれいあやまらるん

あふり来り力さうあふ玉を

あふ海の中らあはれあふあふ
あふらあふあふあふあふ

あつておぼろおぼろくはれに
白やまのりりて則ち
浦嶋の存せよせよ
不及記

くくくくくくくくくく

山よ何人の家と令あ

松同寂之無松大應服

即来一け家仙家よ

令ありやうよ

君のやうを告げ

くきくくくくくく

山行れ鏡山と云へ

御御の御御御

大智と皇の御鏡

作り

くくくくくくく

公を月が鏡ふ

海よりいよふ公

長同

くわりのれ笑

人れせら鏡の

くくくくくく

お方のまら方

くくくくくく

くくくくくく

くくくくくく

おきりや

雑合紅顔笑胸磨三毒

おひ入る一寺なり
夕暮し一寺あり
人仰り記す
古寺の景なり

右寺の景なり
山あり夕暮なり
夕暮なり

魚福守維ノ會也
長月

長月

あはれなるなり
いそがしきなり
はしおのりなり
長月

三車大宅の三素の機也
牛車力なり

羊車牛車鹿車なり
かろしきなり

はれあ近つり、神れらあしよ
漸見渥土泥受定知近水乃也
長同

むきりちり子乃并たあねと
うらうらあまらつさふり

のこすははれあ乃世甲

うらうらと佛や人さすらうん
常在靈鷲山の公と世甲の公
公の公をふやうらうら。上の月
長注川平同

又じれふあ世さか

とていさ佛とられおやまや
け句のりく 長同

いつくふらじやあ國から

これと神人れ人らうん
八幡大菩薩の御記文よ人のあ
吾国人の人より我人よりいれ也
つくくもれあうあは国同
ちりねうら也 長注お同

あひうらうや何者乃松

神垣よ松れあまも八幡山
八幡れ山上お松れ本の中お何者と
いふいも也 しましあの中うらあ
何者れ松人松よかりふきらあ
當社お何者まも也
しましあ下略

うらうら橋とまきんうらうこ
石法あうきうらうら月出く

石清水院時乃紫橋と云ふ也三月
馬山橋と云ふて立寄りて曉月
夜れをいふ事と云ふ夜もあふと
くれと月れと云ふ事と云ふ事
竹のり也
南条舞人橋と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事
八幡南条と云ふ也

此の日の場
王子山玉林一本長く懸く竹
有之山門乃大泉下山して託宣
と云ふ御神寂光乃都へゆり
と云ふ事と云ふ事と云ふ事

終一神と云ふ事と云ふ事
終一相なり也本悉く不修
云也礼拜講られ也と云ふ事
日吉ハ此公也
日吉乃礼拜講此故なり

春日乃神祇也
我より礼釈迦牟尼佛也云々
と云ふ事と云ふ事と云ふ事
竹のり也と云ふ事と云ふ事

宮本神也と云ふ事と云ふ事
竹の臺何者不有細合と云ふ事
竹乃意何者不有也

ひし知んらりと悠々く
これ乃の色経りしれ松
^同 弘とりの神代れし紙ささむ
むしとく色ら経りしの松
此公也老の故を存ふるせてまら
いぬまりしもの也
長
義と舟一任古乃神代れなり

愚句先葉第十

教句

愚作と記しし一紙片と森と乃
夕なりとさくしつはて政弘
とわくはまなれはるる簡月とこと
りりりし漢字よの教句と先言て
可無と也と老作專順しとれゆ
まはるの公とやちかさて瑞から
句はまふ月れ味露の云立物け
とほらうまらしとくはゆるぬ心と
月とれいふふおととふあはは法
お氣なとひなはしとれぬか心は
かまらひし陽の氣とららぬ故也
此二しらたは生すら物なれはよきん

陸陽乃公あり向と異しく一部を鑑
傳り不志也

正月一日独吟連弄よ

月乃融花れ喜らわられたる
立去小年中あつとありあつた
長注回 余信のりあつたや

都乃喜云くれとく
都乃喜云乃公とありとく

長 立けり月

山やけとめれうらつきの云あり
あつきのらつ物也山これのや
あつてうらつと云也後撰よ
梅くふ落とけり雪と云らり

月れうらつきの乃喜と云とれ
梅くふおれりりらつと下句同

近き山をき境新れ色いそふ人
草店乃云よ梅と

やゆとれ云日お白く高の梅
日れゆらやゆとれりりらつと下句同
公の草店乃速懐なりと一夫の云あり
てあつと草店と真のゆれと云也
日始光やゆとれりりらつと下句同
花の咲たり草店乃速懐なり

大田後中入道許めく

梅の喜ふくりふかすあつた月
あつと月れ光よいそふと云梅

うきよのふりつりつと云也
公長いんてつりつり

梅の夜句の中よ

白少乃梅よ色うにわひか

梅よとやふとあやの風ふ

梅よと尻のえと領とら公也

公長いんてつりつり

二葉より白よまといと梅の花

梅有種乃わひと梅よと云と云也

梅ハ梅檀よりかうりつりや

梅乃らふとふと云と云白ひか

ふ乃とふと云と云梅と云と云

ふ乃とふと云と云梅と云と云

梅と云と云と云と云と云と云

かりと古新をいりつり

おのひえいふと云と云と云

ふれと云と云と云と云と云

おのよと云と云と云と云と云

梅よと云と云と云と云と云

白ひめくと云と云と云と云と云

長同

二月よりふあつと云と云と云

かりと云と云と云と云と云

丁云と云と云と云と云と云

浦山と云と云と云と云と云

詞書よと云と云と云と云と云

ふれと云と云と云と云と云

ふれと云と云と云と云と云

かりと云也

去れり云と

山にこれのやうに言ふは
女はよりの去年踏しつらに
と云也

肩 柳をくふれんを去れり云

清日おそく白の雪をくると
ころの雪の中より雪は近き地

は句同注云
澄みゆく程よのれき云

此四句は雪の降りたるや
かきりたれ雪の清く山は
雪名残と云り

柳と

柳ありし風吹柳か

柳乃と云か

去れり云と

肩 催る来よやう人せと云

柳乃風やう人せと云

去れり云と

柳をくふれんを去れり云

柳川乃と云や柳をくふ

来れり云と

去れり云と

去れり云と

去れり云と

去れり云と

あつてはな

約人とてはなよ鳥

約公とてはなよ鳥よ

深成とてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

あつてはなよ鳥よ

世
心づつらまじや

新ぬしやまぬれあ

時節の景氣を中たれたのきり吟

あつ

さうちうもつら花れぬすあ

さやなく艶めつら

小笠原長濃入道お宿

多しつらつらしと花れぬ

安心相對句つらや 世同

漬をほり亭ん

ふふ見ハ新もやや并花れぬ

上板戸部真うん千句ふ

乃花と

つらつらつらやつら人花れぬ

人の海果つらつらつらつら

あましつらつら人つらつら

花とつらつらつらつら

徳倉官領お真れ千句

世用から世い花おつら

花とつらつらつらつら

先年於ま亭り

白やれつらつらつら

まねつらつらつらつら

つらつらつらつらつら

つらつらつらつらつら

つらつらつらつらつら

つらつらつらつらつら

つらつらつらつらつら

長平同景兆花見のまじりて

尺のく人と風をまらたら花盛

風と公ありて音せを静なる氣色

いささか同人と風を初と意と

其座小おわく作也

今日れ者もさう人と風と約たり

なとも無すおろす

あつとそい梅のまゝ一花さり

さびとのらうらうらんらん

細川聡明丸亭子句よ奉

梅のりつゝさいおんれ葉うか

梅のりつゝさいおんれ葉うか

長尾と張るあつと

花やむくつゝれ袖のふも

あつと家し

鳥乃寺も花れ座方のさ

うらおんれさふも

見うし時也外ふ花れ山

南都成身院と云れ

三三三のりつゝさいおんれ

古都乃山すさい林下中

花をりつゝさい

同長春是律時れ

おんれさいおんれ

らつとさいおんれ

あつとさいおんれ

あつとさいおんれ

長同

時ハ今花乃せおんれ

うね本々風やうらみ花盤
常盤本々公ありてや花らんを
いさよと云也

了せれ風や今吹花さうり
一年れ風いふふ敷すなきれは
さうと花のゆりゆり風いさ
まよと云也

今共あててくさうらみ人
花さうり中井ふさぬ山は
常盤中うすも花は清うか

山里よさうらみ花乃らうか
紫陌紅塵乃場ありさうら
山さうらさうら花は公ありと云也

花は有公なり此十二句ありて
足てあはれ艶あはれさうら
花をまらさすい常盤ありか
常盤よとくさうら花乃らうか

長同
さうね本々花さうら心なうか
花は待をたをゆりゆら公よ
あひ返して常盤よ終は花さう
本々よあせと行公さうら心也
本々花さうらあせは我れ花さうら
なうさうらや迷懐なうら

水さうら風さうらまうら山梅
吹風さうら乃あててさうら也
風いさうらまうらなうら山梅さうら
風さうらまうら思案さうら也

風さうらまうら思案さうら也

花と見ゆり中ととて重也と分りて
何人面白くは花とてんとも也
重と花とてん知れりいり許り
ちりてとてりい益を以てや

まろくやそとふ如く重

自 本弄乃公まて也

長 ちりて花れとてれとて下略

遅極を

自 待人よ一云まきよ遅極

自 花れまよ一云まきよ海唇より也

長 年々歳々待まのまきよ遅極也

長 一云まきよ海唇より越流れを

長 一云まきよ海唇より

花と風よりや待遅極

自 去来くまきよ風と待よりを極也

長 まらららららららら

長 花れ家中国れらららや待ん也

池田若狭ち千句一待り乃

自 一生小国月わらや遅日と

自 一日あまららららららら

自 永日れをといひ待りまきよ情をい

一日れ永も莫大れとてわらららら

長 也国月と養れ也

長 一日あまららららららら

よほとて日なえ

東野列山家とてまきよ

祝乃也

花れ心千世八家れ極也

角
うらまゝのうらまゝの解きと名は八雲の桂
万葉より八子代又桂の孫也
雄子多く八雲の桂とあり

上杉戸部亭の月次よ

角
雲の白くや乃家の風

角
上杉の北家藤氏也是をかくと云

水園とて其の白くは乃家の

長注同

角
乃芝の白くは乃家の

角
いつは乃家の乃家の

角
乃家の乃家の

角
乃家の乃家の

角
乃家の乃家の

角
乃家の乃家の

乃神とて乃也 長同

乃の心也

角
乃家の乃家の

角
乃家の乃家の

角
乃家の乃家の

乃家の乃家の

乃家の乃家の

角
乃家の乃家の

乃家の乃家の

乃家の乃家の

角
乃家の乃家の

乃家の乃家の

乃家の乃家の

乃家の乃家の

夏ふくと尻あつてうら山傷

らして花ききふまればよ時鳥

^有 残花と押しむ心也

^之 花れらしてまゝに時鳥をまれば也

花と押しむ心わさす

^有 待てうらうらいつておかし時鳥

^長 待公の時鳥ふまうすまの待公の心也

子知るゆくとまて人知と押しむ心

あまをゆれ

二おれ今をさうし時鳥

^有 一声の夏中うら二おれまうし知公也

^長 但し名をこれ上松典廐亭うらと記す

一おれれいのかうまうらうらゆれお

うらうらうらうらおれわのうらりしと

時鳥やと也

上松典廐乃亭うら

長注がハ心敬浄都法高乃坊うら時鳥と記す

声なきこまおれいしうら時鳥

^有 時鳥なき山をうらうらゆれお

いつてまうらうらうらゆれお

長注を

題——

月や今お入山をうらうら

お月乃らうらうら

いつかんとあつて月れ部云

いつてうらうらうらうら

^有 いつておれおれうらうら

心敬浄乃法局うら

卯 卯花と色よむをぬらり
旅の會をさしうけとて文字お
ふ合てはくまうも也

新樹の心を

長 藤とておとてまけらぬ葉

長 二の連くはく外は有つて

白注を

長 づつとて水の中か

白 あり川乃りてをさしうけ

とて

づつとて

白 されとての葉は杜若

白 うき葉の根も垣とて

葉も

長月

あり

あり鶴も谷よをりて

月乃りてをさしうけ

越へりしとて枝並に

とて

ありやんうら子苗の末の

白 ありとておとて

あり

あり凡のせりけりて

あり

あり 下家とて

長 ありとて

あり ありとて

白 ありとて

花の落敷時分六月忽々なる故也
長注無別文

川ありよおくやまうれ系柳
任者乃社家とて作し會ふ

楠よおりよ神乃むしりか

伊弉諾尊日向国橋乃とて河原
とて取んけ以候とてを結そとあり
けり取任者明神とて結いし
と今れ楠よお合てしゆりしと
候本より原より也

此明神楠乃指し岩屋より結ん

浦上養作と許ん地よりし時

来いんせりやれ小松石乃竹
下るるととこおらとら標りか

よそこれ帳と木丁此帷草此

とら地也 長注およせり

夏夜よりとるに標りか

うて色い葉とて夏夜此為に候也

長同

東へくしりし時此會お月次

うつらんとる芝むしり夏夜か

校りも乃芝と結しゆりし也

原とむしりしゆりしとむし

友原いさなりふりれむわこれ

みゆき人むしりしゆりし

神保宗右衛門尉許ん扇と

心あひれ凡の名は押し扇か

あはれ風は雲よ霞あはれ風は雲よ
扇の風又公れまゝるるを公れ合てす也
北國乃風の巻くはれ口くきく
よあわりと親のいつもよあはれ風
三れ口くけぬれさう越おは扇のあは
れ風をうへ

そいしつ

山松乃陰やうはらうら夏は海
題不知乃よ毎く人れ不審わりの
弄たるとあしりなると一音一句
はららおいつまを題をくお利か
せうよはさうよを也
かろよ海松とりきり
さうらを扇ふうすは夕白うか

あはれ風は雲よ霞あはれ風は雲よ
はれ風は雲よ霞あはれ風は雲よ

夏乃月也

あはれ風は雲よ霞あはれ風は雲よ
あはれ風は雲よ霞あはれ風は雲よ
あはれ風は雲よ霞あはれ風は雲よ
あはれ風は雲よ霞あはれ風は雲よ

あはれ風は雲よ霞あはれ風は雲よ
あはれ風は雲よ霞あはれ風は雲よ
あはれ風は雲よ霞あはれ風は雲よ
あはれ風は雲よ霞あはれ風は雲よ

古きおのりよりたまたまふりあはるる草木
花ありとゆふ草木は公卿のすまは
るよかりゆりよまはるるさかしの
柳花ちりて海をうきぬか
納涼のうら

伊勢國司の館にて千句納涼

納涼と

心もあましくしら袖の納涼と

世より納涼の神りよたまたま長同

花たりかたしやとりなまはる

涼涼一毒よ塵の庭に松

雨涼一雨のあまや梅の風

雨のあまは梅とあなを風と

かよおの萩のうらか 長同

以後と

中と風をぬき涼一涼後川

中と悪作れぬや 長同

梅立のうら日

本枯乃知風をうら一葉か

風やうらうら涼をうら一葉か

二升寺佛地院にて秋の地よ

水清さ地は一葉乃塵りか

け院より塵たりか

おのりか

秋の葉はいくつりうら柳か

公河愁うらうら限なりか

ちりをとてまけの風を柳か

おのりか

秋次品を寫し耐許しん

柳吹河を流し 秋乃あり

七ク

秋乃のなまよあま星の光りけ
槿と牽牛花を心又星の光り
秋乃のなまよあま星の光り

同七月七クの心と

あま星のなまよあま星の光り

秋と

秋風くもや秋涼し 秋の光り
秋風くもや出り秋と秋の光り
秋乃のなまよあま星の光り
秋乃のなまよあま星の光り
秋乃のなまよあま星の光り

秋乃のなまよあま星の光り

秋乃のなまよあま星の光り
秋乃のなまよあま星の光り

秋乃のなまよあま星の光り

秋乃のなまよあま星の光り

秋乃のなまよあま星の光り

秋乃のなまよあま星の光り

秋乃のなまよあま星の光り

秋乃のなまよあま星の光り

秋乃のなまよあま星の光り

秋乃のなまよあま星の光り

秋の夜白の甲

新亭の松やうに橋柱の海

岸よおとさ寄る新亭の松木

山崎橋ゆたか歌の心や

ふかふかとうしつう海お藤

白の柳をさかすまうと恨も心也

世は狭き心やうと作り秋の心也

うくしと桂葉をまわり白屋同

のこれと秋月と未世の秋はあ

本法寺して回心と

あなうらうらうまおし秋は

あなうらうらうまおし秋は

あなうらうらうまおし秋は

あなうらうらうまおし秋は

あなうらうらうまおし秋は

あなうらうらうまおし秋は

あなうらうらうまおし秋は

あなうらうらうまおし秋は

あなうらうらうまおし秋は

あなうらうらうまおし秋は

あなうらうらうまおし秋は

あなうらうらうまおし秋は

あなうらうらうまおし秋は

あなうらうらうまおし秋は

あなうらうらうまおし秋は

あなうらうらうまおし秋は

あなうらうらうまおし秋は

あなうらうらうまおし秋は

あひよあひあふくすて宗長の月
宗長なとあひはひ行て見ゆしとれ
くは月なりし

清いさふとまりし秋長
月そゆ神よ実り色清く深
くし人か母しりさあは清く神
よ実り波乃色清 長同

大神宮は樂よ千句の巻以よ
中

神代ものくや止あらしを月
天の戸をくくくくくくくく
天乃戸をくくくくくくくく
神代の月乃りきりお出ら

花は雲へくくくくくくくく
長門国

よてあふくく

月もあつた深きけく深き海
け国も宗長おけて又行月也
此町あふくくくくくくく月也
白雲も月も秋もくくくく
清く清く大い村立てくくくく
浮沉は秋終よあくくくくく
月あのおのくくくくくく

清く清く月や去の秋おれを
おれをくくくくくくくくく
あふくくくくくくくくく
今れおれあふくくくくくく
あふくくくくくくくくく
あふくくくくくくくくく

一之五
題

后鳴て至最定し一菊は庭

内 厨 菊は庭に咲くは秋の光

大 厨 菊は庭に咲くは秋の光

おれ愛りたときを 秀逸をうらん

長 4 実中禅師の十句一菊と

内 菊は庭に咲くは秋の光

おれ愛りたときを 秀逸をうらん

北行いそそめ早と也

諸高しき早と也

山は 菊は庭に咲くは秋の光

内 山は 菊は庭に咲くは秋の光

山は 菊は庭に咲くは秋の光

菊は庭に咲くは秋の光

菊は庭に咲くは秋の光

菊は庭に咲くは秋の光

上松武庫之亭とて同公と

九月十三日

九月十三日

秋と月半より

菊は庭に咲くは秋の光

菊は庭に咲くは秋の光

菊は庭に咲くは秋の光

菊は庭に咲くは秋の光

菊は庭に咲くは秋の光

菊は庭に咲くは秋の光

菊は庭に咲くは秋の光

しるし脚らりくくし十六夜のはれ
清きありしと十六夜のはれあり
とすゆり 長注サナハヒ

整法新た鳥行んて長月
よ千句ゆりしふ

白 夕月よゆりや国はるる
越中乃名ありきと 長同

長 桑名京んてありし
林のぬと下葉よりせし山
見れ多きさありしや

池田氏し無許ん林のなるよ
白 窓れ松うらふもぬれ心か

白 大の松乃こもりさしきるわむ
ぬれぬりてほろこしとぬ也

長注おし同

長尾肥あき行んて時ぬと

白 時ぬしり心いりぬふり

白 秋れぬの心をとる白くは

くさぬ公色ふみさひま入ぬ

白 へんさぬ也
時ぬしり心いりぬふり

長 蘆の葉満極るぬ

待たぬふ葉葉とつふはぬ
心也それと千入はと川合は

白 心也 悲風飄く吹蘆蘆

白 苦れぬとぬのさし
うらぬとぬのさし

さしぬとぬ

宇津山とて三日の松葉

梅川院の白きよきと立入り有長同

本戸三州乃山家すりて

毎とらるぬや湯山此株乃松

垣川をふる清く株の町ぬと

深きとせま村山の細町ぬ

おのしぬと

そのやて松風よわの時ぬか

松の葉や株の千入乃遠く深

株のしれ松と深きと作り長同

康の言とすすいひ山や松の葉

康の言とすすくくらよ松の葉

感懐ゆきとぬ也

康の言とすすいひ山や松の葉

くくすくくくお松の葉は也

千入とすすくく夕日此松の葉

夕日此松の葉は白松の千入と

りやまきと也

夕日此松の葉は白松の千入と

千入とすすいひ山や松の葉

きくくくくくくくくくく

株のぬ乃ぬのせりくくくく

かきくくくくくくくくく

かきくくくくくくくく

あやしぬくくくくくく

山松の葉は枝のくくく

松の葉は枝のくくくく

松の葉は枝のくくくく

れこけ眼方也 長注野不替

あやふ心を

鳥は言を言ふ時ぬれまふ

海山の時ぬれまふ也

長 春乃時ぬれまふ也

月やまら有の月長の夕時ぬ

月い仕の乃時ぬれまふ也

曉を結して夕乃時ぬれまふ也

あやふけりけり時ぬれまふ也

世ふららまらふ時ぬれまふ也

世ふららまらふ時ぬれまふ也

あやふまらけり時ぬれまふ也

そめくつてららまら時ぬれまふ也

そめくつてららまら時ぬれまふ也

けりけりけりけり

時ぬれまらまらまら

長同

秋の白と木は葉もくもく

白のまらけりけり

花をまらけりけり

花は葉もけりけり

あやふ

まらけりけり

今乃時ぬれまふ也

あやふまらけり

あやふまらけり

冬乃時ぬれまふ也

木枯乃時ぬれまふ也

木々々々々々水々々々々々
木枯々々々々下葉乃松々風
松風々々々々々々々々々々々々
々々々々々々々々々々々々々々々々
艶々々々々々々々々々々々々々々

白川水笑々々

木々々々々々々々々々々々々々
皮々々々々々々々々々々々々々
松々々々々々々々々々々々々々
松々々々々々々々々々々々々々

友沢此道場々々々々々

白菊やほとととととととと
松々々々々々々々々々々々々々
とととととととととととととと

影々々

流水々々々々々々々々々々々々
伊丹兵庫助許々々々水々

夕月夜々々々々々々々々

松々々々々々々々々々々々々々
とととととととととととととと

雪々々

河々々々々々々々々々々々々々
水々々々々々々々々々々々々々

氷々々川眉々々々々々

東坡々々々々々々々々々々々々
此々々 長同

朝倉強正公館々

雪々々々々々々々々々々々々々

長きくまも河邊に比類や

お祭せぬ公や雪と松乃色

松ハ公れ多てなまじやと廿ハ雪と

結々や松の雪と雲し〜ら也

雪降てや〜れれれちと比〜も

つらふりうらぬ松をみ〜り也

はれ泪あふ聊〜とす

空よられあれ〜らむ雪雲

一岬乃沖や 長 一魚れ沖や

ちんま〜雪雲あり〜月れ邊

海初ら雪の層は月れ出て〜光〜

映て〜く深雪よ似〜ら〜云也

月宮乃〜ぬか〜

か〜ら〜〜〜雪れ本未也

海つ〜長秋ぬ〜ら〜 長句

吾妻よ仰〜山富士れ云と〜

白雪よ〜あつられ山〜富士の雪

そあつら〜酒除山〜富士と〜人作り

白雪深〜ら〜云也

和泉櫻〜く〜るゆ〜小雲と

雪の松〜ゆ〜ら〜ら〜二〜を〜極〜すか

あ〜ら〜云と云也

雪よ〜せ雪のわ〜ら〜宿乃松

松わ〜ら〜ら〜扇と〜と〜わ〜ら〜ら〜

〜ら〜雪よ〜ら〜云也

嵐の中〜の松と〜ら〜ら〜や〜ら〜ら〜

ら〜せて〜足〜踏〜人の〜ぬ〜ら〜ら〜巧〜や

鳥羽〜ら〜ら〜ぬ〜ら〜ら〜ゆ〜ら〜ら〜

白鳥の島羽山三軒一雪乃松
鳥羽の松をさくさくなり雪の松
又白鳥の侍うし侍をさく

白鳥の鳥羽山よりなり
かすくく出さしきききき

鳥羽山松乃雪乃のこころなく
なほ系近さあらしき或人

らひ侍一ふ

白苔れわよやと雪乃雪乃雪

冬に雪乃乃甲一

雪ふたれて河ささしき山流川

世をさうやつりれは流る本雪

天道名満と云忽一切し雪より色
ゆりくくす

世中此満欠本れ雪乃雪乃雪

武田光輝亭此十句よ云

鳥の雪乃雪乃雪乃雪乃雪

雪乃雪乃雪乃雪乃雪乃雪乃雪

雪乃雪乃雪乃雪乃雪乃雪乃雪

雪乃雪乃雪乃雪乃雪乃雪乃雪

松梅院して早梅と

斗梅の雪よ立枝の雪よ宿梅

雪よ雪よ雪よ雪よ雪よ雪よ雪

梅の立枝や足つんとありは雪乃

雪よ立枝の足つんとありは雪乃

雪乃雪乃雪

雪乃雪乃雪乃雪乃雪乃雪乃雪

雪乃雪乃雪乃雪乃雪乃雪乃雪

ふはしやふ

梅もやまよまへん梅の花

河津もよまへんあまの記の事

よも梅一枝もふく威も清く

り也 長注聊もよまへん

貴直うまわく年言ふ事

一年とらるる氷れ鏡か

美物鏡れを戸雪と波と伝え

り行也

年中百物乃付もや鏡のきふも

雪と波とをなをくたあり

心せれ會ありて威言れ公を

立ゆもよまへん一年の言

おきふと

年とらるる一日れ夕も

近もよまへんあまの記の事

年よれ一也二月より一月ハ

一日よ言れ也よまへん言ふ事

とらるる

威言れ公言れ神も也よまへん

中注もよまへん一傳下也

祇注奉真書

思向の詠草よ萱草先葉

とて書言れ物二冊有記いつ

よて瓦礫れ敷ありて

竹もよまへん内よ入加る書付

何れも裁句をいふもあはるや
小戸のれい力及いそ前をなきて
一冊十卷ともせり志のいあを
老未の朽柴も六方ゆき
祇のれい名をいふもあはるや
老未といふもあはるや

宗祇判

久内九宗大史殿

二司宗殿

宗長注本序云

祇菴主人藤原宗長書集
連奇老葉といふあり三河の國
水登藤九郎近守此公く
儀のあはるく志をいふもあはるや
とせふとせられしは新紙を
くりていふ人れ公をやゆ
そめつとて公河のいふもあはるや
あはるの艶あして更ふもあはるや
いふもあはるはこれいふもあはるや
此長きしあはるはこれいふもあはるや
くふ信濃尾浩乃くふもあはるや
八格乃くもあはるは酒といふもあはるや
くもあはるはこれいふもあはるや

やすくぬと近守自身より
心之難謝ふ此然る事なりと
しるもて又彼よじりと句毎
よ公れうこといしすくも
あひ乃物かゆりりとあくも
くく書らりるもむじよんぬ
ハコわらあはる人れ公物
うく

同本奥書

這上下兩冊加一見誠是
挹流昂源字香討根源
為池學之要律哉

道遠子

三條西殿
前内府公

同

去身素教法中と別世系素然望
作つて是も素然望と相しん無と望し
あるふんてん人よ池うて下を以
け外題七兩履格以二語之義之思
見とせむ下と奥書同と格かん宗長
面月刻以五冊畢

永三十七林鐘五日

宗長判

宗純上人

此宗祇老葉兩注 尤師觀昭軒
能頌自書之本寫之北野軒
授正之序者尤師自筆之從
及板刊也

室承元甲申初夏日 霜梅堂



